

王維

都留春雄・注

吉川幸次郎・小川環樹編集・校閲

底本は、岩波書店、中國詩人選集6、都留春雄注、吉川幸次郎・小川環樹編集・校閲、一九九七年版（第二九刷）であり、本書では版型を新書版からA5版に拡大し、さらに読みやすさを考慮したため文字の大きさを換え、特に注の部分、は字の配置をおおきく変更した。更にルビを若干追加したなどの小変更を加えてある。猶お、旧字・新字の使い分けは原則として、原典部分は旧字、解説部分は新字とした。

孟城叻囡 郭忠恕筆

王維像・富岡鉄斎筆

目次

解説	10
五言絶句	
友人の雲母の障子に題す	27
息夫人	28
輞川の別業に別る	29
班婕妤 三首	31
送別	34
臨高台 黎拾遺を送る	35
孟浩然を哭す	37
皇甫岳の雲谿の雜題 五首	38
鳥鳴磻	39
蓮花塢	40
鷓鴣堰	41
上平田	42
萍池	44
雜詩 三首	45
輞川集 并序	48
孟城坳	50
華子岡	51
文杏館	53
斤竹嶺	54
鹿柴	57
木蘭柴	58

漆園	辛夷塙	竹里館	北垞	白石灘	金屑泉	樂家瀨	柳浪	歛湖	南垞	臨湖亭	宮槐陌	茱萸汙
・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
79	78	76	75	73	71	70	68	66	65	63	62	60

沈子福の江東に帰るを送る	元二の安西に使いするを送る	白髪を歎ず	廬員外象と崔廼士興宗の林亭を過る	送別	寒食汜上の作	九月九日 山東の兄弟を憶う	七言絶句	田園楽 七首	六言絶句	椒園
・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
108	107	105	103	102	101	99		87		81

菩提寺の禁に、裴迪来りて相い看るに、
 逆賊等、凝碧池上に音楽を作し、供
 奉の人等、声を挙げて便ち一時に涙
 下ると説く。私かに口号を成し、誦
 して裴迪に示す
 少年行 三首

五言律詩

楊長史の果州に赴むくを送る
 張少府に酬ゆ
 輞川閑居 裴秀才迪に贈る
 使して塞上に至る
 岐王に従い楊氏の別業を過う 応教
 偶然の作
 崔員外と同じく秋の宵に寓直す
 秋夜独坐

113 110 121 124 126 129 132 134 137 140

虞部蘇員外の藍田別業を過られ、留まら
 れざるの作に酬ゆ
 山居即事
 梓州の李使君を送る
 香積寺を過う
 觀獵
 春中田園の作
 終南山
 山居秋暝
 嵩山に歸りての作
 輞川に歸りての作
 前陂に汎ぶ
 新晴の晚望
 終南の別業

142 144 146 149 151 153 155 157 159 161 163 165 167

劉藍田に贈る

169

五言排律

秘書泉監ひしよちようかんの日本国にに還るをを送る
并ならびに序じよ

175

王維

解説

一

王維は字を摩詰あざなまきつという。また晩年の官名により王有丞わうゆうじやうとも呼ばれ、李白や杜甫と同時の詩人として、鼎立ていりつ、併称へいせうされる。李白の詩は豪放絢爛けんらんであり、杜甫の詩は沈鬱雄渾ちんうつゆうこんである。それに比べると王維の詩は、典雅靜謐てんがせいひつで、杜甫のように世界をも動かすほどのエネルギーと気魄きはくとに欠ける。後に述べるが、王維は少年の頃にもう詩名があつた。李杜が有名になるまで以前にである（ひと頃の少女歌手を御想像いただきたい）。これは、李杜が比較的晩成の詩人であるのに対して、王維の大きな特色で、彼の詩を考えるのに見のがせない事実である。

さて彼は、杜甫のように世を憂えないし、また戦乱や腐敗した政治によって虐げられた人間の悲惨をうたわない。彼がもつぱらうたい、また強い関心を寄せたのは、自然の美、及び自然の一点景として融合した人間の生活の楽しさに対してである。彼はそれらを、田園詩人といわれる晋の陶淵明（本選集「陶淵明」を参照）、及び山水詩人といわれる劉宋の謝靈運しゃれいゆん、この両者の流れを受けつぎつつ詩に書きあらわすことによつて、新しい美を創造し完成した。中国の自然は、彼に至つて始めて新しい息吹を与えられたと言つてよい。それも唐人らしいダイナミックな息吹をである。

この故に、彼は自然詩人と称せられる。唐の自然詩人と言えば、王維・孟浩然・韋応物・柳宗元のいわゆる王孟韋柳があるが、王維はその代表と目されるのである。

二一

王維はまた、鄭虔（吉川幸次郎博士の「杜甫の友情」——昭和三十二年九月号の「新潮」所載——を参照）や、有名な呉道子と並び称せられる画家で、当時屈指の山水画の名手でもあった。画の方でも後世からは、南画の祖と仰がれている。（王維の絵画については、小林市郎氏著「王維の生涯と芸術」にくわしい）

彼の絵画として有名なものには、彼の別荘である輞川荘を画いた輞川図（挿図及び「輞川集」の序と注四八ページ参照）がある。また彼が、玄宗皇帝の弟であり有力なパトロンでもあった岐王の為に画いた大石の図は、或る暴風雨の日に稲光りと共に屋根を破り、当時の高麗の神嵩山上に飛んで行ったという（元の伊世珍の「瑯嬛記」）。「左甚五郎の竜が夜な夜な池の水を飲んだ」式の話であるが、彼の画が神品扱いされたひとつの証拠になる。彼の画は、後人の種種の画評によると、神韻縹緲とただよっていて、いわゆる画工の画とはおのずから異なっているという。

彼自身もいささか自身があったと見え、「偶然の作六首」（一五五ページ参照）中で、「宿世 詞客に謬まる、前身は応に画師なるべし」とも言っている。

彼の詩画について「詩中に画あり、画中に詩あり。」という批評が広く受け入れられるのも、うなずけることではあるまいか（宋の蘇軾の題跋「摩詰の藍田烟雨図に書す」に、「摩詰の詩を味わえば詩中に画あり、摩

話の画を観れば画中に詩有り」とある)。

以上の如く彼は詩画に卓絶していたのであるが、彼の才能はこの二者のみに止まらなかった。書家としてもすぐれており、音楽に於ても深い才能を持っていた。「旧唐書」及び「新唐書」には次のような話を載せている。

或る人が奏楽の図を手に入れたが、その名が判らなかつた。王維はそれをながめていて、此れは「霓裳羽衣曲」(玄宗皇帝の編曲になる有名な曲)の第三疊の第一拍ですよ、と言つた。好事家があつて樂工を集め実験してみたが、少しの違いもなかつたので感服したという。

全く王維は、博学にして多芸、当時最高の文化人であつた。王侯、貴族、豪族らの上流社会では、席を払って迎えざるものなく、特に寧王(玄宗皇帝の腹違いの兄)、薛王(全じく弟)は、彼を師友として遇したと伝える。つまり上流階級のサロンには、彼は無くてはならぬ存在だつたのだ。

三

唐の薛用弱の「集異記」には次の如く記す。

「王有丞は、年いまだ弱冠(二十歳)ならざるに、文章に名を得たり。性つき音律に閑い、妙れて琵琶を能くす。諸貴(貴人達)の間に遊歴し、尤も岐王(前出)の眷重(目をかけ重んずる)する所と為る云云。」と。年少にして詩人であり音楽家であつた王維は、貴族達の寵児として生活したというのである。

すなわち王維は、単に詠む対象が李白、杜甫と異なつただけではない。詩人としての性格も、だいぶ

異っていたのである。より正しく言えば、李杜の方が王維とは異なっていた、と言わねばなるまい。王維は六朝（呉・東晋・宋・齊・梁・陳の六王朝）時代からの伝統につながる宮廷詩人であり、李杜の方は、そうした伝統の規格にはまらない一風変わった詩人で、当時はあつたらうからである。

従つて王維は、宮廷詩人のおおむねがそうであるように、李杜のような強い骨つぷしを持たなかつた。社会に対し政治に対して、主張すべき自己を主張して凹まないという骨つぷしをである。然しながら、これは彼が全く骨のない柔弱一方の詩人であることを意味するのではない。

王維の時代に至るまでの中国の歴史をふりかえつて見れば、漢帝国の統一が破れて以来、王朝は永くて六十年、短いものは、二、三十年しか存続せず、然もそんな不安定な時代が四、五百年続いていたのである。そのあとを、唐の高祖皇帝李淵（即位六一八年）及びその子太宗皇帝李世民が收拾し、唐朝万代の礎石をきざしたのであるが、その時から玄宗皇帝の即位（七一三年）までに、約百年近い平和な時代が続いて、唐文化はまさにその花を開かんとしていた。永い間、底流として鬱積していた文化の蒼が、思いきりふくらむ機を得たのである。その頃王維は生まれた。更に玄宗皇帝の治世は四十余年の永きにわたり、唐朝の繁栄は頂点に達した。国威は遠く海外に及び、玄宗皇帝自身も英邁で文化に対する良き理解者であつた。殊に玄宗皇帝前半の治世である開元（七一三―七四一年）年間には、政治が行き届いて、後年の安史の乱として表現されるような世情不安の兆など全くなかつた。従つて王侯、貴族、豪族達は、専ら快樂追求に没頭していた。

かくの如き時代の、かくの如き上流階級の中心にあつて、しかもその寵児として王維は位置していたから、杜甫に比べ当然快樂的な詩人であつた。いかにも唐人らしく、ダイナミックで健康で明るくである。世はま

さに世界を以て唐となす気概に溢れていた。だから前述のように、彼に気骨がないと云つても、全く無気力な詩人であると考えてはいけない。無気力というのは、李杜と比較しての話である。

要するに彼は、六朝りくちゆう以来流れてきた詩の主流、政治の主流に順調に適應し、最大に自己を表現しようとした詩人である。その意味で当時の最大の詩人と言つてよからう。当時のあまたの宮廷詩人的性格の人達は、おおむね彼に収斂されるのである。この点から言つても彼は、李杜と並んで当時の詩人を代表するものだと言える。彼の一見枯淡に見える自然詩に豊麗なものが感ぜられるとすれば、彼が宮廷詩人であり、六朝時代の華麗な詩の伝統と、李杜以上に強く結びついていたからであろう。

四

以上第三章においては、専ら彼が健康な快樂をうたう宮廷詩人であることを述べたが、然し彼は、単なる宮廷詩人として終つたのではない。一方において彼は確かに宮廷詩人ではあったが、他方においては、第一章で述べたように、彼だけの世界、つまり自然詩人としての世界があった。彼の人生に対する快樂精神は、自然美と、それと全く融合して生活する喜びをうたうことによつて、その真骨頂が発揮されたのである。例を挙げて見よう。

田園の樂しみ（九三ページ参照）

桃紅復含宿雨

桃ももは紅くれなゐに復またた宿ゆうべの雨あめをふくみ

柳緑更帯春烟

柳は緑に更に春の烟を帯ぶ

花落家僮未掃

花落るも家僮未だ掃わす

鶯啼山客猶眠

鶯啼くも山客猶お眠る

第四句の「山客」は、彼自身を擬しているのであろうが、詩中彼も彼の下僕も、完全に麗わしき自然の田野に溶け込んで楽しげであり、また「詩中に画あり」という評のように、まさに一幅の画でもある。この点で陶淵明や杜甫とは対蹠的である。(李白とは相い重なる部分があると思う。たとえば本選集「李白」上四六ページの「山中問答」を参照)。陶・杜にとつては、自然は結局自分の帰着すべき究極の場所ではなかった。それに反して王維にとつては、此の詩のように自然こそ人生の究極の場所なのである。すなわち、彼自身美しき自然に溶け込み、その完全な一点景と化することによって、人間としての本来の姿を獲得し、みずからの生命が生き生きと流動する。一方自然もまた、彼を吸収同化することによって、はじめてその真価と光彩を発揮する——という、この両者間の微妙な融合。これが彼の詩の大きな特徴であり、また中国の自然詩が彼に至つて始めて完成されたと言われる所以でもある。全く中国の自然は、彼に至つてはじめて新らしい息吹きを与えられ、はじめて自然たり得た、と言つてよからう。

参考までに、宋の胡仔撰「茗溪漁隱叢話」にでている同じく宋の黄庭堅(山谷道人と号す)の語を記して置こう。

山谷老人曰く、「余、頃年(近年)、山に登り水に臨むとき、未だ嘗つて王摩詰の詩を読まずんばあらず。行

きて水の窮まる処に到り、坐して雲の起る時を見る、「〔終南の別業〕詩一六七ページ参照」と。故に知りぬ、此の老の胸次には、定めて泉石膏肓の疾（骨の髓までしみこんだ自然を愛するという病氣）有ることを」と。

五

次に王維は、有名な仏教信者であった。たとえば彼の摩詰という字は、名前の維と合せて「維摩詰」（居士の名、同名のお経がある）となるように囚んだものだし、「京師に在りては、日に十数の名僧に飯し、玄談を以て楽しみとなす……退朝の後、香を焚きて独坐し、禪誦を以て事と為す」（『旧唐書』）「兄弟皆な志を篤うして仏を奉じ、食に葷さものをせず、衣に文綵をせず」（『新唐書』）などとある。また彼の母親である崔氏は、北宗禪の七祖である大照禪師普寂に師事し、「三十余歳、褐衣蔬食（粗末な衣類に野菜の飯）、戒を持して安禅し、樂しみて山林に住み、志、寂靜を求めた」（『莊——輞川莊——を施して寺と為さんことを請うの表』）というし、彼と文名をひとしくした弟の王縉（代宗皇帝——玄宗皇帝の二代あと——の時、宰相になった）に至っては、これは少少行き過ぎた仏教信者であった。父親だけはどうだったか判らないが、彼の家は一家を挙げての仏教信者だったようだ。

従って彼は、仏典に対する造詣が深く、詩中に屢々仏語や仏典を典拠とする故事が使われており、彼の詩の思想的な一特色とされている。たとえば明末清初の徐而菴の「説唐詩」に、「詩は総じて才を離れざるなり。天才有り、地才有り、人才有り。吾れ天才において李太白を得、地才において杜子美（杜甫）を得、人才において王摩詰を得たり。太白は氣韻を以て勝り、子美は格律かくりつを以て勝り、摩詰は理趣を以て勝る。太白

には千秋の逸調あり、子美には一代の規模あり、摩詰は大雄氏（釈迦）の学に精しく、句句皆な聖教（仏陀の教え）に合す」と言うし、明の李夢陽の「空同子・論学上篇」には、「王維詩の高きものは禪に似、卑きものは僧に似る。仏を奉ずるの応なるかな」などと言われるたぐいである。

然しながら、このように彼が熱心な仏教信者であったからといって、彼の詩を所謂の抹香くさいもののように想像してはいけない。彼における仏教とは、もつと快活なものであって、彼が人生において楽しみとすることや生活を、精神的に保証し、安定させるものである。だから彼の自然詩には、ダイナミックな歓びが満ち溢れ、自然もまた、この世の浄土のごとき存在として画かれているのである。要するに当時の仏教とは、上流士人達にとって、自分達の快樂生活を精神的な面から保証し、不安を除いてくれるような都合のよい、有り難い教えとして受け入れられていたろうからである。（唐代の仏教については、塚本善隆博士著「唐中期の浄土教」を参照）

王維をして自然と結びつけさせたのは、仏教の浄土思想が与って力があつたらう。

六

最後に彼の略伝と、詩文集のテキストとについて述べよう。

王維は字を摩詰という。それが「維摩詰」に因んだこと、前章で述べた。生年及び没年は、はっきりしない。没年については、「旧唐書」は「乾元二年（七五九年）七月に卒す」と記し、「新唐書」は、「上元の初め卒す。年は六十一」といささか心もとなげに記している。けれども「旧唐書」の記述は、王維の集中の「弟縉の

新たに左散騎常侍ささんきじょうじを授けらるるを謝するの状じょうに、「上元二年（七六一年）五月四日」と記す日付などあわないので、普通には「乾元」は「上元」の誤伝だと考える。つまりその卒年を上元二年七月だとし、そこから逆算して生卒年を「七〇一―七六一年」だとする。

ところが彼の弟である王縉おうしんの伝を見ると、「旧唐書」「新唐書」ともに、その没年について、徳宗皇帝の建中二年（七八一年）十二月に卒し、年は八十二であったと記している。すなわちその生年は、逆算すれば則天武后の久視元年（七〇〇年）となって、兄の王維よりも一年早く生まれたというおかしなことになる。

王縉は、代宗皇帝の宰相であったし、唐朝の政治に占める比重は、兄の王維とは格段の差がある。且つ歿年及びその年齢は、「両唐書」の一致するところでもあるから、兄の場合よりも正確度が高いとすれば、王維の生年及び卒年は、多分「六九x年―七六一年？」あたりと考えられるのではないかと思う。さすれば李白よりも少し年長となる。

さて彼の父は王廼廉おうしよれんといい、もともと太原たいげんの祁き（今の山西省にある）の人であったが、のちに家を汾水ぶんすいに近い南下した蒲ほ（やはり山西省にある）に徙うつした。官吏としての経歴は、汾州ぶん（現在の汾山西省陽県）司馬（副知事に似た官）で終わっている。汾州司馬といえ、地方官として別にとりたてて言う程の地位ではない。その先祖も似たりよったりで、特に目覚ましい人物もない。その点、杜甫には祖先に晋との杜預とよや、祖父に杜審言としんげんなどがあって（本選集「杜甫」上、六ページ参照）、そのことが杜甫に、社会に対する或る自負と気骨きこつとを持たせたようである。

さてそれは兎も角として、王維は早熟で、弟の王縉とともに早くから俊才をうたわれ、文名があつた。また

早くから（少なくとも十五歳くらいからは）故郷を離れて、都に遊学していたようである。そうして「旧唐書」によれば、開元九年（七二二年）に進士として及第し、大樂丞（音楽を掌る官）に任ぜられたが、何らかの理由で濟州（現在の山東省にあった）の司倉參軍に左遷された。いわゆる何らかの理由については、前出の「集異記」に、樂人のために「黃師子」を舞い、咎められて官より出されたと見える。「黃師子」という舞いは、天子でなければ舞わないものだからである。

その後、名宰相張九齡が政治をとるようになると、右拾遺に拔擢され（開元二十二年・七三四年）、監察御史、左補闕、庫部郎中を歴任した。このとき彼の母親の崔氏が死し、官を離れて喪に服したが、悲しみのために、げっそり肉が落ち、とても喪に堪えそうもなかったという。彼の母に対する孝心と兄弟仲の良いことは、「唐書」のひとつしく記す処である。またついでに記せば、彼は三十歳ごろ妻と死別したが、以後二度と結婚せず、三十年間一室に孤居したという。まさに唐代における「愛のかたみ」とも言いつべきか。

さて母の喪がとけると再び官につき、吏部郎中を経て天保末に給事中と為った。この時が彼の人生にとり、もっとも多難な時期である。すなわち安祿山の乱が起り、玄宗皇帝が蜀（今の四川省）の成都に避難したとき、彼は天子のお供をしそこねて賊軍の捕虜となったからである。そうして長安及び洛陽の寺院に監禁され（「万古傷心」の詩注、一一〇ページ参照）、賊軍に仕官するよう脅迫されて、心ならずも屈してしまった。王維はこの時、服薬してひどい下痢を起し、唾になったと偽った。だがそんな抵抗ではどうにもならなかった。

乱が平定されると、賊に仕えた官吏はすべて罪せられることとなり、彼も戦犯として裁判されることになった。この時彼は、同じ憂き目に遭った鄭虔等と、当時の元勳崔円の家を精魂込めて画き、その崔円のと

りなしで罪の軽からんことを願った。幸に、彼が賊中で天子を憶った詩「万戸傷心云云」が、その当時行在所にあった肅宗皇帝の耳に達していた。また弟の王縉は、その時の自分の官位である刑部侍郎（法務次官）を削り、兄の罪の代償にしたいと願った。

そんなこんなで、やっと太子中允に下降されただけで事なきを得たのである。やがて太子中庶子に遷り、中書舍人を経て再び給事中となり、尚書右丞（内閣書記官長）としてその生涯を終った。彼を王右丞と呼び、また彼の詩文集を「王右丞集」と呼ぶことがあるのは、そのためである。

なお彼は以上の如き政治生活中、何時の頃から宋之間（則天武后朝の宮廷詩人）の藍田（長安の東南にある県名）の別荘を手に入れ、輞川荘と号した。公務の余暇には、道友の裴迪と舟を浮かべて往来し、琴を弾じ詩を賦し、のびのびと自然に浸る生活を楽しんだことが、よく知られている（「輞川集」四八ページ参照）。因みにこの有名な別荘は、のちに清源寺という寺になった。

さてその死にあたっては、尤も頼りとしていた弟の王縉が、都へ召しかえされる旅の途中として、鳳翔（今の陝西省にある）に在った。そこで筆を求めて弟に別れる書簡を作り、また平素親しかった親戚知友にも別れの手紙数通を書き、朋友にむかつては、あつく仏を奉じて心を修めるよう励まし、筆を捨てて息が絶えたという。

なお「旧唐書」に言う。

代宗の時、縉、宰相となる。代宗、文を好み、常つて縉に請いて曰く、「卿の伯氏、天宝の中、詩名代に冠たり。朕嘗つて諸王の座に于て其の樂章（音楽として奏せられる詩）を聞けり。今、多少の文集有りや。卿、

進来す可し。」と。縉曰く、「臣が兄、開元中の詩、百千余篇あり。天宝の事（祿山の乱）の後、十に一も存せず。此ごろ中外の親故の間に于て、相い与に編綴し、都べて四百余篇を得たり。」と。翌日之れを上まつる。帝、優詔して褒賞す、と。

七

さて王維の詩文集の刊本には、元の劉須溪（辰翁）先生校本 唐王右丞集六卷、明の顧起經（玄緯）注類箋唐王右丞詩集十卷文集四卷外編一卷末三卷、明の顧可久注 唐王右丞詩集六卷、清の趙殿成注 王右丞集箋注二十八卷卷首卷末各一卷、などがあるが、うち尤も信頼のおけるものは、最後の趙殿成本である。このテキストは、詩は劉辰翁校本に載っているものをそのまま古詩と近体詩とに分類して十四巻とし、劉本にはなくて他のテキスト等に見えるもの（王維の作かどうか疑わしいものをも含む）を別に外編一卷（第十五巻）とし、文は顧玄緯本によって第十六巻から第二十八巻までに分類している。詩だけでなく文にも信頼できる校訂と注（特に仏典に関する注は従来信頼すべきものがなかった）を施し、なお巻首には、伝記に関する資料や王維に関して詠んだ他詩人達の詩を集め、巻末には、広く詩評、画録を集録し、更に年譜を付したものである。なお劉辰翁校本には、詩題の下に王維自身の注？ 王縉の書き加えた注？ 或いは劉辰翁が伝聞した？ と考えられる注があり、趙殿成はそれらを原注としてそのまま存している（本書に「原注」というのはそれである）。さて本書に採った詩（九十五首）は、すべて此の趙殿成本にもとづいている。各テキスト相互の詩句の異同についてはすべて記さず、特に意をもって趙本の字句を改めたものに限り触れた。また趙本の外編の詩は一

首も採っていない。

次に我が国で出版された王維に関する主な著作を挙げる。

- 一 積清譚氏解「王右丞集」(統国訳漢文大成本) 昭和四年七月東京国民文庫刊行会刊
- 二 鈴木豹軒校閲・喜多尾城南著「王維詩評釈」 大正十二年十二月京都彙文堂刊
- 三 小林太市郎著「王維の生涯と芸術」 昭和十九年十二月大阪全国書房刊
- 四 吉川幸次郎・三好達治共著「新唐詩選」(岩波新書) 昭和二十七年八月東京岩波書店刊

①は積清譚氏が趙殿成本に依って王維の詩全部に注解を施したもので、全詩に及ぶものとしては唯一のものである。②は王維の代表作七十首あまりを選んで、くわしく評釈したもの。③は王維の伝記、芸術等に関する優れた著作で一読をおすすめする。④は他の詩人の詩とともに王維の詩が十二首おさめられている。その僅か十二首の解説は、王維詩の核心に触れるものである。また王維の訳詩として優れたものに、日夏耿之介ひなつこうのすけ氏の「東西古今集」(昭和二十五年三月東京酣燈社刊)がある。所収の訳詩十二首は、何れも名訳である。

なお巻頭の写真は郭忠恕かくちゆうじゆ(五代末宋初の文学者・画家)筆輞川図の初めの部分である。貝塚茂樹教授が秘蔵されるもので、このたび特別の御厚意により本書に載せることができた。また肖像の方は富岡鉄斎筆。鉄斎が、所蔵の王維の顧玄緯本にいたずら画き? したもの。この書物自体は、現在京都大学文学部に蔵められ

1519°

五言絕句

題友人雲

友人の雲母の障子に

母障子

題す

君家雲母障

君が家の雲母障

持向野庭開

持して野庭に向つて開く

自有山泉入

おのずから山泉の入る有り

非因彩畫來

彩畫に因つて來るにあらず

※原注に十五歳の時の作とある。最も若い時の作である。

※障子 屏風・ついたての類をいう。目かくしに使うもの。趙殿成の注に、「唐時、屏障を呼んで障子と為す。

杜甫に、李尊師の松樹障子に題する歌、「有り云々」とある。

※野庭 庭の草はらをいうのであろう。

君の家の雲母の屏風。

持ち出して、庭で開いてみたら、

勝手に山や泉が飛び込んできた。

画家が彩色しないのに。

息夫人

息夫人

莫以今時寵

今時の寵を以て

能忘舊日恩

能く旧日の恩を忘るる莫し

看花滿眼淚

花を看るも滿眼の涙

不共楚王言

楚王と共に言わず

※原注に二十歳の時の作とある。

※息夫人 息は、春秋時代の国名。夫人とは、諸侯の妻、或いは天子の妾の称号。奥さんという手軽な意ではない。息夫人については、「左伝、莊公十四年」に、「楚子（子は子爵の意）、息を滅ぼし息嬀（息夫人）を以て歸り、堵敖及び成王を生ましむ。未だ言わず（楚子と話さない）。楚子之れを問う。対えて曰く、吾れ一婦人にして二夫に事う、綻え死す能わずとも其れ又た奚ぞ言わん」とある。また唐の孟棻撰「本事詩」に、「寧王憲（玄宗皇帝の腹違いの兄）、貴盛にして寵妓數十人、皆な絶芸上色なり。宅の左に餅を売る者の妻有り、緘白にして明媚、王、一見して属目し、厚く其の夫に遺りて之れを取る。寵惜、等を逾えたり。環歳（丸一年）、因りて之れに問う、汝、復た餅師を憶うや否やと。默然として対えず。王、餅師を召して之れに見せしむ。其の妻注視し、双涙頬を垂れ、情に勝えざるが若し。時に王の座客十余人あり、皆な当

時の文士、悽異せひ（特に感にうたれる）ならざる無し。王、命じて詩を賦せしむ。王右丞維の詩、先ず成る、云々」とある。すなわち息夫人の故事を仮りて、餅屋の妻の情を写した作。

※ 舊日恩 かつてうけた愛情。一段高い序列の人から受ける愛は、受ける側からは恩という。例えば、親の愛は子供からいえば恩である。

※ 楚王 「左伝」にある楚子を指す。

いまうけている寵愛はありながらも、

昔日の愛情を忘れかねてか、

花を見ても、眼にいつぱいの涙をためている。

せめてもの操として、楚王とは言葉をかわさない。

別輞川別業

輞川もうせんの別業べつぎょうに別わか

依遅いぢ動車馬

依遅いぢとして車馬しやばを動かし

惆悵ちゆうたう出松蘿

惆悵ちゆうたうして松蘿しんらを出いづ

忍別しの青山去

忍しのんで青山せいざんに別わかれて去さるも

其如綠水何

其れ綠水を如何んせん

※ 輞川別業「輞川集」の序を参照（四八ページ）。

※ 依遲 いぢ ぐずぐずするさま。南斉の王融の詩に「参差 しんしとして別緒 しよ（別離の情）興り、依遲として離慕起る」とある。

※ 惆悵 ちゆうぢやう もの悲しいさま。

※ 松蘿 しよら 松にからんで生え上るつた。

※ 忍別の句「青山に別れて去るに忍びんや」とも読めるが、それでは第四句と全く同じ事を言うことになる。

思いきり悪く、のろのろと馬車を動かし、

悲しい心で、松づたのからむ間を出てゆく。

この美しい青山に、やっとの思いで別れても、

緑の水 かみとはとてもものことに、別れきれない。

班婕妤三首

班婕妤 はんしやうま
三首 さんしゆ

玉牕螢影度

玉窓 ぎよくそう 螢影度 けいえいわたり

金殿人聲絕

金殿 きんでん 人聲 じんせい絶 いたゆ

秋夜守羅幃

秋夜 しゆうや 羅幃 らゐを守 まもり

孤燈耿不滅

孤燈 ことう 耿 こうとして滅 めつせず

※ 樂府すなわち歌謡の体裁の詩である。

※ 班婕妤 はんしやうま 漢の成帝（在位前三二―一七年）の愛人。婕妤は、宮中の女官名。彼女は淑やかな女性で、一時、

成帝に非常に寵愛されたが、後、微賤の出身で且つ淫蕩な趙飛燕姉妹に、その愛を奪われ、身に害の及ぶのを惧れてみずから身を引き、皇太后の住む長信宮つきの女官となった。この薄幸の佳人は、後の詩人達の好箇の詩材となり、多くのすぐれた閨怨の詩が作られた。

※ 金殿 立派な御殿。長信宮をいう。

※ 羅幃 らゐ うす絹のカーテン。

※ 守 寝ないで起きていることに使う。例えば守歳とは、除夜に夜明けまで起きていることをいう。

※ 耿こ ぼんやりと明るいさま。

※ 不滅 趙殿成本は、「明滅」となっているが、宋版「樂府詩集」によって改めた。

玉をちりばめた窓を、螢の火が横切る。

こがね作りの御殿は、ひっそりと寝静まり、人声がしない。

このながい秋の夜を、絹のとばりの中でひとり起きている。

その部屋の灯だけが、ひとつかがやいて何時までも消えようとしなない。

宮殿生秋草

きゆうでん しゆうそうしやう
宮殿 秋草生じ

君王恩幸踈

くんおう おんこうそ
君王 恩幸踈なり

那堪聞鳳吹

なん ぼうすい きき
那ぞ鳳吹を聞くに堪えん

門外度金輿

もんがい きんよわた
門外 金輿度る

※ 鳳吹 笙しょうをいう。天子の行幸の際に奏する。梁の丘遲の詩に、「馳道ちじどう(天子の通る道)、鳳吹を聞く」とあり、

唐の呂延濟の注に、「鳳吹は、笙なり。笙の体、鳳に似るの故なり」とある。

※ 金輿 こがね作りの車。天子の乗る車をほめていった。

宮殿には、秋の草が生い茂り、

君主の愛のおとずれは、とだえてしまった。

(その身が、) どうして笙の響きを聞いていられよう。
いま門の外を、天子のくるまが通りすぎる。

怪來妝閣閉

怪あやしみ来るきた妝閣しょうかくの閉とじ

朝下不相迎

朝ちようより下くだって相あい迎むかえざるを

總向春園裏

總すべて春園しゆんえんの裏うちに向むこう

花間笑語聲

花間かかん 笑語しょうごの聲こゑ

※ 此の詩は「唐詩選」にも採られている。

※ 怪來 あやしむ。来は、軽く添えてある字。

※ 妝閣 しょうかく 宮女たちの住まうたかどの。妝は、粧とおなじ。

※ 朝下 宮女たちが朝廷から退出する。

※ 不相迎 迎えにきてくれない。相字については、「輞川集・竹里館」の詩注（七六ページ）を参照。

※ 總向の句 女官たちは、すべて春の庭園に出て、花の咲き乱れた中で、楽しみに笑いさざめいている。その声を、寵を失った班婕妤はんせつよが、寂しく部屋に閉じ籠もって聴いている意であろう。尤も森槐南氏は、次のように解される。「たとえ人を迎えても、春園の花間で笑語しょうごするだけだ」と。尚、森氏は第二句を、内廷の常例によって一度天子におめにかかる以外は、人と迎接しない意にとられる。

春だというのに、彼女たちの艶いぎな、たかどのが閉じられ、

また宮中からかえっても、迎えに来てくれないのをおかしいと書いていたら、

みんなそろって春の園に出、咲き乱れる花にまじって、楽しみに笑いさざめいている。

送別

送そう別べつ

山中相送罷

山中 相ひ送ること罷みて

日暮掩柴扉

日暮 柴扉を掩づ

春草明年緑

春草 明年緑なるも

王孫歸不歸

王孫 歸るや 歸らざるや

※春草・王孫 「楚辞・招隱士」に、「王孫遊（たびたつ）んで帰らず、春草生じて萋萋たり」という有名な句があり、ここはそれをとって春草と王孫とを縁語にしている。王孫は貴人の子弟を意味するが、相手に對する尊称としても使われる。「史記・淮陰侯列伝」に、「母（老婆）怒りて曰く、大丈夫、自ずから食する」と能わず、吾れ王孫を哀れみて食を進む、豈に報を望まんや」とある。ここは後者。

山中での別れも終り、

ひぐれに柴の扉をしめる。

春の草はくる年も緑に萌えようが、

若旦那は帰るや、帰られぬや。

臨高臺

臨高臺りんこうたい
黎拾遺れいしゆいを

送黎拾遺

送おくる

相送臨高臺

相あい送おくりて高こう台たいに臨のぞめば

川原杏何極

川せん原げん杏ようと何なんぞ極きわまらん

日暮飛鳥還

日暮にちぼ 飛鳥ひちよう還かえる

行人去不息

行人去こうじんさつて息やすまず

※ 此の詩は「唐詩選」にも採られている。

※ 臨高臺りんこうだい 漢の歌謡である樂府がふ、鏡歌きょうか（行軍の時、馬上で奏するという軍樂）の一。

※ 黎拾遺れいしゅうい 黎昕れいきんという人。詳しいことはわからない、やはり王維に、「黎拾遺昕、裴迪はいでい過あらる。秋夜、雨に対す
るの作」という題の詩がある。拾遺は、唐の官名。天子の施政上の見とおし、遺おちたるを拾うのを役目と
する。

※ 川原 川を含む平原。

友を送つて高台にのぼれば、

流れゆく川をはさむ平原のはてしなきことよ。

日はかたむき、飛ぶ鳥はねぐらにかえるに、

旅人は、遠ざかりゆき、とどまらず。

哭孟浩然

孟浩然を哭す

故人不可見

故人 見る可からず

漢水日東流

漢水 日々に東流す

借問襄陽老

借問す 襄陽の老

江山空蔡洲

江山 空しく蔡洲あり

※この詩は、原注によれば、王維が殿中侍御史として南選を知し、襄陽に至って作ったものである。南選とは唐の制度で、嶺南などすなわち今の広東、広西などに、時によっては朝廷より直接に選補使を遣わし、官吏候補者を選ばせること（唐書選舉志）。

※哭 声を上げて泣くこと。死者に対する礼儀。

※孟浩然 盛唐の詩人。今の湖北省襄陽の人で、自然詩人として知られ、王維、韋応物、柳宗元と合せて、王孟章柳と称せられる。彼の「春眠、暁を覚えず云々」という詩は有名。開元二十八年（七四〇）背にできものができて没した。時に彼は年五十二、王維は四十歳であった。

※故人 旧友。

※漢水 漢口附近で揚子江に流れ込む川で、襄陽はその沿岸にある都市。

※ 借問 しやもん ちよっとお尋ねする。

※ 蔡洲 さいしゅう 襄陽の近くにある漢水中の島の名。後漢の蔡瑁が住んでいたので、蔡洲と名づけたという。

古い知人とはもう会えなくなり、

漢水は、毎日、東へ東へと流れてやまない。

せめては襄陽の故老に、あのひとの在りし日のさまを尋ねたいが、
江と山を見わたしても、からっぽの蔡洲があるだけ。

皇甫岳雲谿雜

こうぼうがく うんけい ざつだい 皇甫岳の雲谿の雜題 五首 ごしゆ

題五首

※ 皇甫岳 人名。「新唐書」の「宰相世系表」に、皇甫恂の子として岳という名が挙がっているが、すなわちその人かどうか判らない。

※ 雲谿 皇甫岳の別荘の名であろう。

鳥鳴礮

鳥鳴礮 ちやうめい かん

人間桂花落

人間ひとにして桂けい花か落おつ

夜靜春山空

夜よる靜しずかにして春しゅん山さん空くうし

月出驚山鳥

月つき出いでて山さん鳥ちやうを驚おどろかし

時鳴春澗中

時ときに春しゅん澗かんの中うちに鳴なく

※礮 澗と同じで谷川のこと。

※人間 勤めを離れた静かな暮らしをいう。間は閑とおなじ。

※桂花 もくせいの花。普通、もくせいは秋咲くが、春咲く種類のものもあるという。(植物名美図考)

※春山空 空は、わびしい感じでなく、逆にカランとしてすっきりした感じ。桂花が散り落ちたので、春の山は空しく感じられるのである。

※驚山鳥 山鳥が驚くとも読める。

※時鳴 時時鳴く。

人は、のんびり閑ひまな生活。もくせいの花が散っている。

静かな夜で、春の山は、ひっそりしている。
やがて、とほうもなく明るい月が上って、山鳥を驚かし、
驚いた鳥は、時々春の谷川で鳴いている。

蓮花塙

蓮花塙れんか

日日採蓮去

日日ひび蓮はすを採りて去と

洲長多暮歸

洲す長くし多おほ暮くれ歸かえること多おほし

弄篙莫濺水

篙こうを弄ろうして 水みずを濺そそぐこと莫なれ

畏濕紅蓮衣

紅蓮こうれんの衣いを湿うるおさんことを畏おそる

※塙 土手。堤。

※篙 舟を進める棹。

※紅蓮衣 紅い蓮の花びらを衣服に喩えた諧謔。北周の庾信の詩に、「蓮浦 紅衣を落す」とあるのにもとづく。

毎日毎日この堤つつみにきて、蓮を採って帰ってゆくが、
洲すが長いので、日暮れまで帰らぬ事が多い。
それはそれで宜しいけれど、棹をもてあそんで、水をおかけなさるな。
紅い蓮の花びらが濡れやしませんか。

鷓鴣堰

鷓鴣堰ろしえん

乍たち向紅蓮こうれん没むかして
復ま出清浦せいほ颺あかる
獨ひと立何なん襪り襪し
銜うお魚古こ査さ上うえ
魚うおを銜くむ 古こ査さの上うえ

※ 鷓鴣堰 水をせきとめて、鵜うを飼ってある場所。

※ 乍 あるいは。——と思うと。

※ 清浦せいほ 清らかな水辺。

※ 颺 鳥の飛び去ること。

※ 離襪りし 鳥の羽毛の生えそめた、柔らかい、ふっくらした様の形容。晋の木華の「海の賦」に「鬣離ふさうは離襪りしたり、鶴子は淋滲りんしんたり」とあり、唐の李善注に「離襪、淋滲は、毛羽始めて生ずるの貌かたち」とある。

※ 古查こさ 查は楂と同じ。水中の浮木。

紅い蓮の方へもぐったかと思うと、
また清らかな水辺を飛びゆく。

ひとり立ってたときは、なんとふくよかに美しいことか。

古びた浮木の上で、魚をくわえている。

上平田

上平田じょうへいでん

朝畊上平田

朝あしたに畊たがやす上平田じょうへいでん

暮畊上平田

暮くれに畊たがやす上平田じょうへいでん

借問問津者

借問しゃもんす 津しんを問とう者もの

寧知沮溺賢

寧なんぞ沮溺そできが賢けんを知らんやし

※ 上平田 題の上平田は、趙殿成本では、上田平となっている。今顧可久本によって改めた。

※ 借問 しゃもん ちよっとお尋ねいたしますが。

※ 問津者 津は渡し場。「論語・微子篇」にでている話。長沮・桀溺 ちやうそ けつでき という二人の隠者が、並んで耕していた。孔子がそこを通り過ぎ、弟子の子路に渡し場を問わせた。長沮は孔子だと知ると、「孔子なら諸国を流浪しているから渡し場などよくご存じでしょう」と答えた。そこで子路は更に桀溺に尋ねると、桀溺は「世の中がすべて水の流れるように、どんどん乱れた方向に進んでいるのに、君は一体誰とそれを変えようというのか。君は人を避ける孔子のような人物に、つき従っているより、世の中全体を避ける私のような者に従う方が、よくはなかるうか。」と答え、播いた種に土をかけ続けて、渡し場を教えなかったという。これに対する孔子の答えは次の如くであった、「人間は鳥や獣と一緒に集団生活をするわけにゆかないのだから、たとえよくない方向にすすんでいても、人間と集団生活しなくて、一体誰と一緒に生活するのか。天下に正しい道が行われているなら、私は変えようとしたりしない」と。

※ 沮溺 そでき 長沮 ちやうそ と桀溺 けつでき。暗に別荘の主、皇甫岳に擬している。

けちな俗世は問題にせず、朝も上平田を耕し、

暮れも上平田を耕していて、

わたしに渡し場を問う人があるなら、ちよっとひと言お尋ねしたい。

一体あなた方には、どうして長沮 ちやうそ と桀溺 けつでき の偉さがわかろうかと。

萍池

萍池へいち

春池深且廣

春池しゅんち 深くして且つひろ廣し

會待輕舟廻

會かならず輕舟けいしゆの廻めぐるを待たまん

靡靡綠萍合

靡靡ひひとして綠萍りよくへい合がつし

垂楊掃復開

垂楊すいよう 掃はいて復また開ひらく

※萍へい うきすさ。

※會へい きつと。

※輕舟 舟足の輕い舟。

※靡靡 なよやかに美しいさま。また、なびくさま。南齊しやうちようの謝朓しやちやうの「杜若としやぐの賦」に、「景ひかりは奕奕えきき（ひかり輝くさ
ま）として以て四照し、枝は靡靡ひひとして葉傾く」とある。

※垂楊すいよう しだれやなぎ。

深くて広い春の池は、

軽やかな舟がめぐってくれるのを待っているにちがいない。

なよやかに美しい緑のうき草は、池の面をおおいとじ、
しだれ柳が、それを掃いてまた開こうとする。

雑詩三首

雑詩
三首

※ 雑詩とあるも女性のなげきを歌った閨怨の詩である。すなわち、商用のため旅先にある夫を憶う妻の心を、
叙べた。但し真中の一首は、その逆。

家住孟津河 家は住す 孟津河
門對孟津口 門は対す 孟津口
常有江南船 常に江南の船有り
寄書家中否 書を家中に寄すや否や

※ 家住の句 妻が黄河の孟津という港に住んでいる意。また孟津とは、黄河の北岸に孟という処があり、そこ
に渡し場を置いたので孟津という。今の河南省洛陽の東北に位する。

※ 常有の句 随の煬帝が運河を開鑿して以来、南北の船の往来が盛んであった。この妻の夫は、商用のため江
南にいたのである。

わたしは、孟津の河のほとりにすまい、
門は港の口にむかっている。

港には、いつも江南の船がもやってあるが、
主人は家へ便りを言付けられしや。

君自故郷來 君 故郷より來る

應知故郷事 應に故郷の事を知るべし

來日綺牕前 來る日 綺窓の前

寒梅著花未 寒梅 花を著けしや未だしや

※ 應知 きつと知っているだろう。

※ 綺牕 美しく飾った窓。ここは妻の部屋の窓。

故郷よりはるばる來られし君ゆえ、
さだめて故郷の事を知るならむ。

あちらを出立されし時、飾り窓の前の
寒梅は、花をつけしや。

已見寒梅發

すでに寒梅の発くを見

復聞啼鳥聲

また啼鳥の声を聞く

愁心視春草

愁心 春草を視

畏向玉階生

玉階に向つて生ずるを畏る

※ 愁心の二句 この二句は、裏に「楚辞」の「王孫遊たちて歸らず、春艸生じて萋萋たり」という有名な句を

ふまえている。「萋萋」は草のはびこるさま。王孫に自分の夫を比し、楚辞の句の如くなるのを畏れるわけである。また一解として、春の草が玉のきざはしに生えはびこるように、自分の心のうれいが、しげくなりはしないか、と恐れる意にもとれる。その時は、視を「なぞらえ」の意に読む。

すでに寒梅は、花をひらき、

また、鳥の囀りも聞こえてくるのに、

心はうれしい、春の草を視つめ、

夫が帰らずに、春の草が玉のきざはしに茂りはしないかとおそれる。

輞川集 并序

輞川集 並びに序

余別業在輞川山谷。其遊止有孟
城坳・華子岡・文杏館・斤竹嶺・
鹿柴・木蘭柴・茱萸泚・宮槐陌・
臨湖亭・南垞・欽湖・柳浪・欒家
瀨、金屑泉・白石灘・北垞・竹里
館・辛夷塢・漆園・椒園等。與裴
迪閒暇各賦絕句云爾。

余が別業は、輞川山谷に在り。其の遊止するところ、
孟城坳・華子岡・文杏館・斤竹嶺・鹿柴・木蘭柴・
茱萸泚・宮槐陌・臨湖亭・南垞・欽湖・柳浪・欒
家瀨・金屑泉・白石灘・北垞・竹里館・辛夷塢・漆
園・椒園等有り。裴迪と閒暇に各々絶句を賦すと
爾云う。

※ 輞川集 王維の有名な連作。元来独立した詩集であった。内容は序にある如く、彼が友人裴迪と、彼の別荘である輞川荘中の各処で、相い唱和した五言絶句が各々二十首ずつ、合せて四十首収められている。

※ 別業 別荘。輞川荘のこと。かつての則天武后朝の宮廷詩人、宋之問の所有であったものを、王維が買い取り、手を加え、輞川荘と名づけた。また彼自身、輞川荘中の勝景を画き、輞川図と題したが、これが世に流布し、多くの画人に模写された。(挿図参照) 甚だしきに至っては、唐末より、無頼の男子の刺青にま

で、輞川図一本が彫りこまれ、自慢の種になったという。(宋の陶穀の「清異録」)

※ 輞川 川の名。宋の程大昌撰「雍録」によれば、「輞川は、藍田県(長安の東南、終南山麓に位する県名)の西南二十里に在り。王維の別墅、焉に在り。本と宋之問の別圃(別邸)なり。」とあり、また清の雍正十三年刊の「陝西通志」には、「輞川は、蘭田県の南、嶢山の口に在り、県を去ること八里。川口は両山の峽と為り、山に随つて石を鑿ち、計るに五里許り、路、甚だ險狭なり。此を過ぎれば豁然として開朗(からりと開け)、村墅、相い望み、蔚然たる桑麻肥饒の地なり。四顧すれば、山巒(山なみ)は掩映(隠顯)し、似んど路無きが若し。環り転じて南すること凡そ十三区、其の美、愈々奇なり。王摩詰の別業、焉に在り」とある。「輞川」という名は、その川水が、あたかも車の輪のような美しい波紋を画いて流れるので、そう呼ばれたのだという。因みに「輞」とは車の外輪の意である。

※ 遊止 行遊の場所。

※ 王維の詩友として知られている。とりわけ王維と唱和したこの「輞川集」の作は有名である。

※ 賦絶句 絶句で題詠する。絶句とは、五字または七字等の句、四句でなりたつ詩型をいう。

※ 云爾 —— という次第です。

私の別荘は、輞川の流れている谷に在って、そのなかには氣ばらしの場所として、孟城坳・華子岡・文杏館・斤竹嶺・鹿柴・木蘭柴・茱萸泝・宮槐陌・臨湖亭・南垞・欽湖・柳浪・欒家瀨・金屑泉・白石灘・北垞・竹里館・辛夷塢・漆園・椒園などがあり、裴迪君とひまな折りに、それらの場所を各々絶句によりあつた、というわけなのです。

孟城坳

孟城坳

新家孟城口

あら 新たに家す 孟城の口り

古木餘衰柳

こぼく すいりゆう のこ 古木 衰柳を餘す

來者復爲誰

らいしや また たれ な 來者は復た誰と爲す

空悲昔人有

むな かな せきじん ゆう 空しく悲しむ 昔人の有

※ 孟城坳 古城址の名。坳は窪地。

※ 古木の句 古木である衰柳が残っている意。

※ 來者 將來、或いは將來の人の意。ここは後者。

※ 空悲の句 この句は普通には、王維が空しく昔人の所有者を偲び悲しむ意にとる。その際には、昔人とは、この別荘の前の所有者宋之問を含んでいよう。然しながら私は、「過去の所有者について悲しく思うこともに、將來自分もまた悲しまれる身であることを悲しむ」意ととっておく。なお、吉川・三好両氏著「新唐詩選」を参照されたい。

今度あらたに孟城のあと近く、住居をしつらえた。

そこには、古びて力の無い柳が、いくつかのこざれている。

私が死んだのち、ここを所有する人はいったい誰であるのか、それはわからないことながら、その人に私もまた、過去の所有者として、悲しく偲ばれるのであろうか。

同詠 裴廬

結廬古城下

廬を結ぶ 古城の下

時登古城上

時に登る 古城の上

古城非疇昔

古城は疇昔に非ずして

今人自來往

今人 自のずから來往す

華子岡

華子岡

飛鳥去不窮

飛鳥 去つて窮まらず

連山復秋色

連山 復た秋色

上下華子岡

華子岡を上下すれば

惆悵情何極

惆悵して情 何ぞ極まらん

※ 華子岡 別荘の入口である孟城坳から少し進んだところにある小山の名。劉宋の謝靈運の詩の題に、はるか

南方にある全く別な土地であるが、「華子岡に入る。是れ麻源の第三谷」というのがあり、それにちなんで名づけたものと思われる。華子は、華子期という仙人のこと。謝の詩に対する唐の李善の注に、「謝靈運の山居図に曰く、華子岡は麻山の第三の谷、故老、相伝う、華子期なる者は祿里の弟子なり。此の頂に翔集すと。故に華子もて称と為すなり」とある。

※ 去不窮 自由にどこまでも飛びゆく意。あるいは、あとからあとからと飛びゆきてつきない意ともとれる。

※ 惆悵 とらえようのないもの悲しいさま。

※ なお此の詩は、吉川・三好両氏著「新唐詩選」を参照されたい。

飛ぶ鳥は、どこまでもどこころよげに飛びゆき、

山なみも、秋のけはいにつつまれた。

そんな華子岡を、のぼりくんだりすれば、

うらがなしい心のおもいはつきない。

同詠 裴迪

落日松風起

還家草露稀

落日 松風起る

家に還れば草露稀なり

雲光侵履跡
山翠拂人衣

雲くもまの光ひかりは履跡くつあとに侵さしいり
山やまの（草木くさきの）翠みどりは人ひとの衣ころもをはらう

文杏館

文杏館ぶんきょうかん

文杏裁爲梁
香茅結爲宇
不知棟裏雲
去作人間雨

文杏ぶんきょう裁たちて梁りょうと為なし
香茅こうぼう結むすんで宇うと為なす
知しらず 棟裏とうりの雲くも
去さつて人間じんかんの雨あめと作なるや

※ 文杏館 華子岡を過ぎた所にある建物の名。

※ 文杏の句 漢の司馬相如の「長門の賦」に、「木蘭を刻して以て櫳（たるき）と為し、文杏を飾りて以て梁と為す」とあるのにもとづく。文杏は木の名で、梁は棟木、はりのこと。

※ 香茅 草の名。かおりが高い。晋の左思の「呉都の賦」に、「食葛・香茅・石帆」とある。

※ 宇 やね。

※ 棟裏雲 晋の郭璞の「游仙詩」に、「雲は梁棟の間より生じ、風は窓戸の裏より出づ」とあるのを典拠とする。文杏館を仙人の住居に見たてた諧謔。

長門の賦のごとく、文杏をきつて梁となし、
かおりたかい香茅で、屋根をふいたが、
さてあの郭璞の詩のごとく、この文杏館の棟のあたりに生ずる雲が、
漂い去って、人間世界に雨を降らすかな。

同詠 裴廸

迢迢文杏館

躋攀日已屢

南嶺與北湖

前看復回顧

迢^{たか}迢^{たか}文^{ぶん}杏^き館^{やうかん}

躋^{のぼ}攀^{のぼ}日^ひ已^{すで}に屢^{しばしば}なり

南^{みなみ}の嶺^{みね}と北^{きた}の湖^{みづうみ}と

前^{まえ}を看^{なが}め 復^{また}た回^{かえ}り顧^みる

斤竹嶺

斤竹嶺

檀欒映空曲

青翠漾漣漪

檀^{だんらん}欒^{くわん}映^{くわん}空^{くわん}曲^{くわん}に映^{えい}じ

青^{せいすい}翠^{すい}漾^{れん}漣^い漪^たに漾^たう

暗入商山路
暗に商山あん しょうざんの路みちに入る
樵人不可知
樵人しょうじん 知る可しからべらず

※ 斤竹嶺 文杏館の背後にある山名。斤竹きんちくとは、はつきりしないが、篔簹竹きんちく（竹の一種。節のつまった、皮の白い堅い竹）だという。劉宋の謝靈運の詩の題に、「斤竹澗より、嶺を越えて溪行す」というのがあり、多分それにもとづくのではないかと思われる。

※ 檀欒 疊韻、すなわち同母音の擬態語。高く伸びた竹の茂るさま。

※ 空曲 人けなくひっそりした川のくま。

※ 青翠 竹のみどり。二字は同子音。

※ 漣漪 奇麗なさざ波。「納涼」詩注（いふ参照。）

※ 暗 人知れず。いつのまにか。こっそり。

※ 商山路 斤竹の生えている谷川沿いの道を指す。商山は、終南連山注の一山。昔、秦の虐政を避けて、東園公・綺里季・夏黄公・甬里先生うりせんせいの所謂四皓しごうといわれる四人の高士がこの山に隠れ住んだ。のちに漢の高祖がその賢を聞き、召そうとしたが至らず、山中に隠れ住んで己をまげなかったという。四皓とは、この四人のひげも眉も真白だったからかく称した。四皓のことは「史記・留侯世家」などに見える。

※ 樵人 きのこり。

※ 不可知 四皓に擬した自分の心が判らないだろうの意。

細く高く生い茂る竹は、ひっそりした谷川のよどみに影をうつし、
そのしたたるばかりのみどりは、さざ波に揺れ動いている。

この静かでうるわしい自然——商山の路に、いつのまにか分け入る心は、
きこりの親父に判るまい。

同詠 裴廸

明流 紆且直

緑篠 密復深

一逕 通山路

行歌 望舊岑

明^すめる流^{なが}れは紆^{まが}り且^また直^{なお}く

緑^{みどり}の篠^{ささ}は密^{みつ}にして復^{また}た深^{ふか}し

一^{いつ}逕^{けい} 山^{さん}路^ろに通^{つう}ず

行^{こう}歌^かして旧^{ふる}き岑^{みね}を望^{のぞ}む

鹿柴

鹿柴

空山不見人

空山 人を見ず

但聞人語響

但だ人語の響くを聞く

返景入深林

返景 深林に入り

復照青苔上

復た青苔の上を照らす

※ 此の詩は、「唐詩選」にも採られている。また吉川・三好両氏著「新唐詩選」にもみえる。

※ 鹿柴 鹿を飼つてある場所。柴とは、鹿を飼う柵のこと。

※ 空山 人けのない山。

※ 人語響 人の語声が、明晰でなくこだまして聞こえる。

※ 返景 夕日のでりかえし。梁の劉孝綽の詩に、「返景 池林に入る」とあるのにもとづくのであろう。また、「初学記」に、「日、西に落ち、光、東に返り照る。此れを反（返）景と謂う」とある。

※ 復照の句 「復た青苔を照らして上れり」と読む読み方もある。

しずもりかえった山。人かげは見えない。

ただ人声らしきものが、こだましてぼんやり聞こえてくる。

夕日の光が、深い林にさしこみ、

また、まっさおな苔の上を照らし出す。

同詠 裴廸

日夕見寒山
便爲獨往客
不知松林事
但有麝麝跡

日夕(夕方) 寒山を見
便(すな)わち(じく)独往(じく)の客(きやく)と為(な)る
知ら(し)ず 松林(しようりん)の事(こと)
但(た)だ麝(きん) (鹿(か)の類(るい)) 麝(か) (牝(めい)鹿(か)) の跡(あと)有(あ)り

木蘭柴

秋山斂餘照
飛鳥逐前侶
彩翠時分明
夕嵐無處所

木蘭柴

秋山(しゅうざん) 余照(よしょう)を斂(おさ)め
飛鳥(ひちよう) 前侶(ぜんりよ)を逐(お)う
彩翠(さいすい) 時(とき)に分明(ぶんめい)
夕嵐(せきらん) 処(しよ)所(しよ)無(な)し

※ 木蘭柴 斤竹嶺・鹿柴から少し進んだ場所。木蘭は、桂に似た匂いのよい木。

※ 餘照 夕映え。

※ 前侶 先行の友達。

※ 彩翠 秋になってさまざまに色づいた、山の草木のみどり。

※ 分明 はっきりと明らかなき意。

※ 嵐 山の氣。山に生ずるもやの類。

※ 無處所 かかる所がない。処所は、居る所の意。戦国時代の楚の宋玉の「高唐の賦」に、「風止み雨霽て、雲、雲は無し」とあり、また宋之問（初唐の宮廷詩人）の詩にも、「霽たる雲は処所無く、台館は曉に蒼蒼たり」と見える。

秋の山の夕映えは、おさまり、

鳥は、友を追って飛びゆく。

時時、はなやいだ山のみどりが、くつきりして、

夕もやのかかるところがない。

同詠 裴廸

蒼蒼落日時

蒼蒼（日がかげりを帯びたさま）たり

落日の時

鳥聲亂溪水
綠溪路轉深
幽興何時已

鳥聲ちようせい 溪水けいすいに乱みだる
溪たにに緑そいて路みちの転まず深すみく
幽興ゆうきよう 何れの時ときか已やまん

茱萸泚

茱萸泚しゆゆはん

結實紅且綠
復如花更開
山中倘留客
置此茱萸杯

実みを結むすんで 紅こうにして且かつ緑りよく
復また 花はなの更さらに開ひらくが如ごとし
山さん中ちゆう 倘もし客きやくを留とどめば
此この茱萸しゆゆの杯はいを置おかん

※ 茱萸泚しゆゆはん 木蘭柴から更に進んだ場所。泚はんは、水辺のきりぎし。そこに茱萸が生えているので名とした。茱萸は、「植物名実図考」によると、木の高さ一丈あまり、皮は青緑色で、葉は椿に似てひろく厚く紫色。三月に紅紫色の細かい花を開き、七月・八月に実を結ぶが、その実は、わかいつきはほんのり黄色みを帯び、熟すれば深紫色になるといふ。また、丁度九月九日頃は赤い色を呈するといふ。和名を「かわはじかみ」といふ植物らしい。

※ 山中 輞川莊を指す。

※置 用意する意。「置酒」などと使われる。

※茱萸杯 茱萸の紅い実をうかせた酒の杯。桜桃の実でも入ったカクテル・グラスを想像すればよからう。
北周の庾信の詩に「芙蓉は酒を承くるの杯」また「芙蓉を即わち杯に奉ず」とあるのにもとづき、芙蓉杯
ならぬ茱萸杯と洒落れていったのであろう。

紅と緑ととりどりに実を結んで、

また、花が咲いたようだ。

もしこの山中に客をおとめ申すなら、

さしずめこの茱萸の杯を出さねばなるまい。

同詠 裴迪

飄香亂椒桂

香りを飄よわせて椒桂（茱萸を指す）乱れ

布葉間檀欒

葉を布きて檀欒（竹の姿）に間わる

雲日雖迴照

雲と日は迴り照らすと雖も

森沈猶自寒

森沈（ふかく茂るさま）として猶お自のずから寒し

宮槐陌

宮槐陌きゅうかいばく

仄徑蔭宮槐

仄徑そくけい 宮槐きゅうかいに蔭おほわる

幽陰多綠苔

幽陰ゆういん 綠苔りよくたい多し

應門但迎掃

應門おうもんの但た迎掃げいそうするは

畏有山僧來

山僧さんそうの來きたるを畏おそる

※ 宮槐陌 えんじゆの植わっている道。茱萸泚はんから歙湖いの方へゆく途中の場所。宮槐きゅうかいは、えんじゆの一種で

ある守宮槐のことであろうか。中国最古の辞書「爾雅」に、「守宮槐。葉は昼聶とじ宵炕よるひらく」とある。

※ 仄徑 傾斜のあるこみち。

※ 幽陰 俗世から離れて奥深い感じのする日陰。

※ 應門 門番。

えんじゆの木蔭のかたむけるこみち。

その奥深い日陰は、ほとんど緑に苔むしている。

門番がひたすら掃き清めているが、

山の坊さんのお見えなのかと、かしこんだのだろう。

同詠 裴廸

門南宮槐陌
是向歆湖道
秋來山雨多
落葉無人掃

門の南の宮槐陌
是れ歆湖に向うの道
秋來つて山雨多く
落りし葉を人の掃く無し

臨湖亭

輕舸迎上客
悠悠湖上來
當軒對樽酒
四面芙蓉開

臨湖亭

輕舸もて上客を迎え
悠悠として湖上に来る
軒に當つて尊酒に対すれば
四面 芙蓉開く

※ 臨湖亭 宮槐陌から更に進んだ処にある建物。

※ 輕舸 船あしの軽い船。舸は、舟の大きいもの。

※ 上客 尊客。立派なお客。

※ 悠悠 俗世に拘束されない、一段と次元の高いのびのびした心の状態。心のひろがりゆく状態。

※ 軒 軒ばの窓のあたりを指す。

※ 芙蓉 はすの花。

軽ろやかな船に、立派なお客をお迎えし、
けちな世間なぞ知らぬ顔して、のびのびと湖上の臨湖亭にやってきた。
窓のあたりで酒樽にむかうと、
なんと四方は、はすの花盛り。

同詠 裴廸

當軒彌澗漾 軒に當つて弥々澗漾（波の揺れ動くさま）

孤月正徘徊 孤月 正に徘徊す

谷口猿聲發 谷口に猿（猿）声発し

風傳入戸來 風の伝えて戸に入り來る

南 垞

南 垞なんだ

輕舟南垞去

輕舟けいしゅう 南垞なんだに去るさ

北垞森難卽

北垞ほくだは森びんとして即つき難がたし

隔浦望人家

浦ほを隔へだてて人家じんかを望のぞめば

遙遙不相識

遙遙ようようとして相あい識しらず

※ 南垞 臨湖亭から更に進んだ湖岸の場所。垞は、「集韻」によれば、小邱（おか）の名としてあるが、趙殿成は、垞は宅の古字、垞の訛ったものかも知れぬとする。

※ 去 只今の中国語のごとく、ゆくの意。

※ 北垞ほくだ 後出。（七四ページ参照）

※ 森びん 水の果てしなくひとがるさま。

※ 難卽 近づき難い。

※ 浦 水辺。海岸にかぎらない。

※ 不相識 見わけがつかぬ。

船あし軽く南垞に行くくと、

北垞は、ひろびろとした水の彼方で、近づき難い。

入り江ごしに人家をながめても。誰の家やも、はろぼろとして見わけがつかぬ。

同詠 裴奭

孤舟信風泊

南垞湖水岸

落日下崦嵫

清波殊淼漫

孤舟 風に信せて泊む

南垞は湖水の岸なり

落日は崦嵫（日の入る処をいう）に下らんとし

清波は殊に淼漫（果てしなくみなぎるさま）たり

敬湖

吹簫凌極浦

日暮送夫君

湖上一廻首

敬湖

簫を吹きて極浦を凌ぎ

日暮 夫君を送る

湖上 一たび首を廻らせば

山青卷白雲

山青やまあおく 白雲はくうん 卷まく

※ 欽湖 湖名。

※ 簫 管楽器の一種。

※ 凌極浦 極浦は、遠くはなれた水辺。「楚辭」の「九歌・湘君」に、「涇陽（地名）を極浦に望む」とあり、後

漢の王逸の注に「極は遠なり。浦は水涯なり」とある。凌とは、遠い浦のまだその先まで行くことをいう。

※ 夫君 友人を称している語。元来は妻が夫を呼ぶ言葉であるが、唐人は、友人を称して夫君と云った。

孟浩然の詩に、「衡門（冠木門）、猶お未だ掩さず、竹立して夫君を望む」とあるのは、その例である。

簫を吹きならして、遠くの浜辺のその先まで船をこぎゆき、

湖上で、ちよつとふりむくと、

青青とした山と、まるく巻いた白い雲とがあった。

同詠 裴迪

空澗湖水廣

空澗くうかん（からりとして広広したさま）として湖水こすいはひろく

青熒天色同

青あおく熒かがやきて天そらの色いろとひとし

艤舟一長嘯
四面來清風

舟を艤めて一たび長嘯すれば
四面より清風の来る

柳浪

柳浪

分行接綺樹
倒影入清漪
不學御溝上
春風傷別離

分行 綺樹 接し
倒影 清漪に入る
学ばず 御溝の上り
春風 別離を傷むを

※ 柳浪 柳の植わっている水辺の名。

※ 分行 行を分けて。つまり二列になつての意。

※ 接綺樹 奇麗な樹が次々と接近して続く。

※ 清漪 美しい波紋を画く清らかな水。

※ 御溝 宮城のお堀。御の字は、天子に関して使う。

※ 傷別離 昔の中国では別離の際に、柳を手折つて旅立つ人に贈つた。楽府曲の「折楊柳」はその意である。

従って、別離と柳とは密接な関係がある。

奇麗な柳が二列に並んでうち続き、

さざ波立つ清らかな水に、さかさの影をおとしているが、

宮城のお堀のあたり、

春風の吹くなかで、別離を悲しみ傷むのとは、似てもつかぬ。

同詠 裴廸

映池同一色

逐吹散如絲

結陰既得地

何謝陶家時

池に映じて同一の色

吹くかぜを逐って散ずること糸の如し

陰を結りて既に地を得たり

何ぞ謝らん 陶家の時（陶淵明の宅前に五柳樹があつた）

樂家瀬

樂家瀬

颯颯秋雨 中

颯颯たる秋雨の中

淺淺石榴瀉

淺淺として石榴瀉ぐ

跳波自相濺

跳る波は自のずから相い濺ぎ

白鷺驚復下

白鷺 驚きて復た下る

※ 樂家瀬 柳浪から更に進んだところにある早瀬。

※ 颯颯 元来は風の音の形容だが、ここは秋雨の降る音をいう。

※ 淺淺 水の早く流れるさま。「楚辞・九歌」に、「石榴瀉淺淺」とある。

※ 石榴瀉 石榴は、岩上の水流。瀉は、水が流れ下ること。南斉の謝朓の詩に、「霍靡（美の形容）とし青莎被い、潺湲として石榴瀉ぐ」とある句にもとづくのであろう。

※ 跳波の句 しぶきをあげて流れるさまをいう。自は、無心にの意。

※ 白鷺驚 白鷺のだしぬけに飛びたつのをいう。

颯颯と音たてて降る秋の雨の中を

岩瀬の流れが、浅浅と奔り下っている。

跳る浪は、無心にしぶきをあげるのに、

白鷺は、驚いて飛びたち、また舞い下りた。

同詠 裴廸

瀬聲喧極浦

沿歩向南津

汎汎鳧鷗渡

時時欲近人

瀬声は極浦（遠くの水辺。樂家瀬をいう）に喧すし

（水辺に）沿い歩いて南津に向えば

汎汎（浮び流れるさま）として鳧鷗渡り

時時 人に近づかんと欲す

金屑泉

日飲金屑泉

少當千餘歲

翠鳳翔文螭

羽節朝玉帝

金屑泉

日々金屑泉を飲む

少くも千余歳に当らん

翠鳳 文螭を翔り

羽節して玉帝に朝せん

※ 金屑泉きんせつせん 樂家瀬らんからいの近くにある泉。裴廸の同詠に、「金碧拾う可きが如し」とあるから、水色に因んで命名したのであろう。

※ 少當 すこし飲んだだけでも・・・に当る。

※ 翠鳳 西王母の乗るくるま。西王母は女仙。王嘉（四世紀）の「拾遺記」に、「西王母は翠鳳の輦くるまに乗って来る。前導するに文虎・文豹を以てし、後に雕麟ちようりん（奇麗な模様のあるきりん）・紫塵を列つらぬ」とある。

※ 文螭ぶんち 竜の一種。黄色で角がないという。文とは、模様のある意。

※ 羽節うがひ 羽蓋うがひと毛節もうせつ。羽蓋は、羽毛でできた日傘の一種。毛節は、一種の毛やり。どちらも仙人の儀容を示すもの。梁の「桓真人昇仙記」に、「五色の霞の内に、霓旌げいせい（虹の旗）・羽節・仙童・靈官（仙官）百余人を見る」とある。

※ 朝玉帝 朝は、参内すること。玉帝は、天帝のこと。天上にいる至高神。

毎日飲む金屑泉は、

すこし飲んでも一千余歳。

そうなればさしずめ、あの西王母の乗るといふ、翠鳳すいほうのくるまにうち乗って、文螭ぶんちを先触れに飛行させ、羽蓋うがひ・毛節もうせつ、儀容をととのえ、天帝に敬意を表せん。

同詠 裴廸はいてき

滌渟澹不流
金碧如可拾
迎晨含素華
獨往事朝汲

滌渟えいてい（ささやかな水）澹たんとして流ながれず
金碧こんぺき 拾ひろう可べきが如ごとし
晨あしたを迎むかえて素しらき華はなのごときをふく含めば
獨ひとり住ゆきて朝あしたに汲たくむを事こととす

白石灘

白石灘

清淺白石灘
綠蒲向堪把
家住水東西
浣紗明月下

清淺せいせんたる白石灘はくせきたん
綠蒲りよくほは向むかんど把とるに堪たえたり
家いえは住じゆうす 水みずの東とう西さい
紗さをあらう 明めい月げつのもと下

※ 白石灘はくせきたん 樂家灘らんからい、金屑泉きんせつせんから更に進んだところにある淺灘。灘は淺灘のこと。海の難所の灘なだではない。
※ 蒲 水草の名。手芸として編んで色色に利用する。また乾いたものは引火し易いので、ほくちにする。

※ 堪把 採集して束にするのに傾合いだ。把は、手にとって束ねる意。樂府の「拔蒲」に、「君と同じく蒲を拔
けども、竟日きやうじつ（一日中）、把を成さず」とある。

※ 浣紗 紗は、うすぎぬ。昔、越王勾踐こうせんが呉王夫差ふさに献じた美女西施せいしは、見いだされるまで、絹ぎれをさらす女労働者として、水辺で紗を洗っていたという。

清らかで底石の白い浅瀬、白石灘はくせきたん。

その水辺に生えている緑の蒲は、もう女達に束ねられてよさそうだ。

川の東西に住む人家では、

明るい月の水辺で、女達がうすぎぬを洗っている。

同詠 裴廸はいてき

跂石復臨水

石を踏み復た水に臨むいしをふまみずのぞむ

弄波情未極

波を弄んで情未だ極まらずなみをあそびじょういまきわ

日下川上寒

日は下りて川の上りの寒くひはくだりてかわのほとのさむ

浮雲淡無色

浮雲は淡くして色無しふうんはあわいろなし

北 垞

北 垞ほくだ

北陀湖水北
雑樹映朱欄
透迤南川水
明滅青林端

北陀湖水の北
雑樹朱欄に映ず
透迤たり南川の水
青林の端に明滅す

※ 北坨 欽湖の北。南坨に対する場所。白石灘の更に先。

※ 朱欄 湖岸の建物のあかい手すり。

※ 透迤 まがりくねるさま。

※ 南川水 南山の川水。輞川であろう。

北坨は湖水の北にあり、

樹樹のみどりに、あかい手すりがてりはえている。

はるか彼方をながむれば、南山の川水は、まがりまがって流れてゆき、
青い林のはずれに見えかくれする。

同詠 裴廸

南山北垞下
結宇臨歛湖
每欲採樵去
扁舟出菰蒲

南山なんざん北垞ほくだの下もと
宇いを結むすびて歛湖いこに臨のぞむ
樵たきを採とりに去ゆかんと欲ほつする毎ごとに
扁舟へんしゆう 菰蒲こほ（水草の生えている所）より出いづ

竹里館

竹里館ちくりかん

獨坐幽篁裏
彈琴復長嘯
深林人不知
明月來相照

獨ひとり坐ざす 幽篁ゆうしゆうの裏うち
琴きんを弾ひじ復またた長嘯ちようしやうす
深林しんりん 人知ひとしらず
明月めいげつ來きたつて相あい照てらす

※ 竹里館 北垞から更に進んだところにある竹に囲まれた建物。此の詩は、「唐詩選」にも採られている。また吉川・三好両氏著「新唐詩選」にも見える。

※ 幽篁 俗から離れた奥深い竹やぶ。「楚辞」の「九歌・山鬼」に、「余、幽篁に処りて終に天を見ず」とあり、後漢の王逸注に、「幽篁は竹林なり」とある。また唐の五臣注には、「幽は深なり、篁は竹叢なり」とある。

※ 長嘯 口をすぼめて息ながにうたう。

※相照 照らしてくれるの意。相の字は、「お互に……し合う」という重い意でなく、動作の及ぶ対象があれば、一方的に及んでも「相」の字を使う。

奥深い竹やぶのなかの、この竹里館にひとり坐り、
琴を弾じ、また歌をうたってよい気分になる。
俗界離れた深い林のこの楽しさを、人は知らないが、
明るい月が上って、照らしてくれるよ。

同詠 裴廸

來過竹里館
日與道相親
出入惟山鳥
幽深無世人

竹里館ちくりかんに來り過きたとい
日ひと道みちと相あい親したしむ
出しゆつ入にゆうするは惟ただ山鳥さんちやう
幽深ゆうしん 世人せじん無なし

辛夷塙

辛夷塙

木末芙蓉花

木末の芙蓉花

山中發紅萼

山中紅萼を發す

澗戸寂無人

澗戸寂として人無し

紛紛開且落

紛紛として開き且つ落つ

※ 辛夷塙 もくれんの植えてある土手。辛夷については、南宋の学者、朱熹の「楚辞集注」によれば、「花が

始めてひらくときに筆のようなので、北方の人は木筆と呼び、また、この花の咲くのが一番早いので、南方の人は迎春花と呼ぶ」という。この詩は、吉川・三好両氏著「新唐詩選」にも見える。

※ 木末の句 芙蓉は、はすの花のこと。「楚辞」の「九歌・湘君」に、「薜荔（蔓草の類）を水中に采り、芙蓉を木末に攀る」とあって、不可能なことだととえている。ここは恐らく「楚辞」にもとづくのであろうから、「芙蓉が梢に咲いたかと思まがう辛夷の花」の意であろう。

※ 紅萼 紅い花。萼は、所謂「がく」で花ではないが、ここは第四句の「落」と韻をそろえて使った。

※ 澗戸 谷川近くの家の戸口。

※ 紛紛 いらい乱れるさま。

こずえの芙蓉ふようとも見まがう辛夷もくれんの花が、
山中に紅いはなびらをひらいた。

谷川近くの家の戸口は、ひっそりして人のけはいもない。
花が、ただ咲き乱れ、また散り乱れるにまかされている。

同詠どうえい 裴廸はいてき

綠堤春草合

綠堤りよくていに春草しゆんそう合あつまり

王孫自留翫

王孫おうそん（若旦那わがにやは）自おのずから留とどまり翫あそぶ

況有辛夷花

況いんや 辛夷しんいの花はなの

色與芙蓉亂

色いろは芙蓉ふようと乱まごう有あるをや

漆園

漆園しつえん

古人非傲吏

古人こじん 傲吏ごうりに非あらず

自闕經世務

自みずから經世けいせいの務つとめを闕かく

偶寄一微官

偶たまたま一いち微官いびかんに寄よせ

婆娑數株樹

婆娑ぼさす 數株すうしゆの樹じゆ

※ 漆園 漆うるしの木の植えてある処。竹里館・辛夷塢を経て別荘も奥まった場所。宋の羅大経の「鶴林玉露」によれば、朱熹は此の詩について、「余、平生、王摩詰の詩に、古人非傲吏云云と云えるを愛し、以為らく、及ぶ可からずと。挙げて以て人に語るも領解する者少し」と言ったという。

※ 古人の句 古人は、莊子を指し、傲は、おごる、たかぶる、或いは自分の思うままにして、はばからない意。「史記・莊子伝」に、「莊子は蒙人なり。名は周。周嘗つて蒙の漆園の吏と為る。楚の威王、莊周の賢なるを聞き、使をして幣（贈物）を厚うして之を迎えしめ、以て相（宰相）為るを許す。莊周、笑つて楚の使者に謂つて曰く、亟さかやかに去れ、我を汚すこと無かれ」とある。これを典拠として、秦の郭璞の「遊仙詩」に、「漆園に傲吏有り」という句があるが、ここは、それを更にふまえて、「古人非傲吏」と言った。

※ 經世務 世を治めるつとめ。

※ 婆娑 本来の意としては中国最古の辞書「爾雅」に、「舞なり」とあるが、普通には自由な生活をすることに使う。

※ 數株樹 趙殿成本では、「數枝樹」となっている。いま他本によって改めた。

大臣になってほしいという楚王の招きを、すげなく断つたので、郭璞は、莊子を傲吏だと詠じたが、実は莊子は傲吏ではなく、自分から世を治める仕事を避けたのだろう。私も、たまたまさやかな一官職に身をあずけ、

荘先生の生哲学にあやかつて、何本かの庭木の下で、気ままにぶらぶらする。

同詠 裴廸

好閑早成性
果此諧宿諾
今日漆園遊
還同莊叟樂

閑かなるを好みて早くより性と成り
果して此に宿ての諾ないに諧う
今日 漆園の遊
還た莊の叟の樂みに同ぜり

椒園

桂尊迎帝子
杜若贈佳人
椒漿奠瑶席
欲下雲中君

椒園

桂尊もて帝子を迎え
杜若をば佳人に贈る
椒漿を瑶席に奠し
雲中君を下さんと欲す

※ 椒園

椒の樹の植えてある庭園。漆園の隣りにある。晋の陸機の「毛詩草木鳥獸虫魚疏」によれば、椒は、樹は茱萸に似ているがとげがあり、葉は堅くなめらかでつやがあるという。匂いがよいので、茶などに製

する際に一緒に煮て香りをつける。

※ 桂尊 桂の酒樽。尊は樽と同じ。桂は香木。

※ 帝子 「楚辞」の「九歌・湘夫人」に、「帝子、北渚に降る」とあり、宋の朱熹の注によれば、「帝子」とは女神、湘夫人のことだという。湘君、湘夫人、いずれも古の聖天子堯の娘で舜帝の妃となり、舜の死後、湘水に入水したといわれる。

※ 杜若の句 「楚辞」の「九歌・湘君」に、「芳しき洲に杜若を采り、將に以て下女（侍女）に遺らんとす」とあるのを典拠とする。杜若は草名。「かきつばた」ではない。和名を「やぶみようが」というものだという。

※ 椒漿の句 「楚辞」の「九歌・東皇太一」に、「桂酒と椒漿とを奠う」とあるのにもとづく。漢の王逸注によれば、「椒漿」とは、漿の中に椒の入れてあるものだという。なお、奠は、地上におきすえて供える。瑶席は、美しい玉のような席（多く神仙に関する場合に使われる）の意である。

※ 雲中君 雲の神。「楚辞・九歌」に、「雲中君」なる章がある。

匂いよき桂の樽酒を用意して、湘夫人をお客に迎え、

香しき杜若をとって佳き人に贈らむ。

また香りも高きこの椒漿を、玉の敷物におそなえいたし、

雲の神を下界にくだして、神神と交遊したい。

同詠 裴廼

丹刺 胃人衣
芳香 留過客
幸堪 調鼎用
願君 垂採摘

あか とし ひと ころも ひきとめ
丹き刺は人の衣を胃め
かんば かお よき きやくじと
芳しき香りは過れる客を留む
さいわい ちようてい
幸に調鼎(料理)の用に堪えなば
ねが さいてき た
願わくは君よ 採摘を垂れたまえ(おつみとり下さい)

六言絕句

田園樂七首

田園樂 でんえんがく
七首 しちしゆ

※ 田園の美しき、及びその中に生活する楽しさをうたったもの。

出入千門萬戸

せんもんばんこ
千門萬戸を出入し

經過北里南鄰

ほくりなんりん
北里南隣を経過す

蹀躞鳴珂有底

ちようしやう
蹀躞として珂を鳴らす な底か有らむ

崆峒散髮何人

くどうとう
崆峒に髪を散ずるは何人ぞ

※ せんもんばんこ千門萬戸 長安の宮殿の壮大さをのべた言葉。後漢の班固の「西都の賦」に、「千門を張りて万戸を立つ」とある。

※ ほくりなんりん北里南隣 北里とは、妓女の居る区域すなわち長安の平康里のこと。唐の孫棨の「北里誌」に、「平康里。北門を入り東に回る三曲は、即ち諸妓、居する所の聚（ブロック）なり」とある。なお此の句は、晋の左思の

詩に、「南隣は鐘磬を撃ち、北里は笙竽を吹く」に、もとづくのであろう。

※ ちようしやう蹀躞 馬の進みゆくさま。

※ か珂 くつわにつける玉の馬飾り。揺れるとぶつかって音をたてる。

※ 有底 有何と同じ。

※ 崆峒くうとう 仙界の山の名で、黄帝が広成子という仙人に道を問うたという山。「莊子外篇・在有ざいゆう」にある。

※ 散髪 髪を結わず自然のままにしてあること。超俗の人、特に仙人などの髪が散髪である。

千門万户の宮殿に出入し、仕官や地位の進むのを願う人もある。

遊里ちよまの巷ちよまを横行し、遊侠の人生を送るもある。

玉珂かの音もさわやかに、馬に揺られゆく官吏にしても、それがつまりどうだというのだ。

むかし黄帝軒轅えん氏が、崆峒山くうとうで至道を問うた散髪の人とは何人なにびとなりや。

再見封侯萬戸

再見さいけんして侯こうに万戸ばんこに封ほうぜられ

立談賜璧一雙

立談りつだんして璧へき一いつ双そうを賜たまわる

詎勝耦耕南畝

詎なんぞ勝まさらん 南畝なんぼに耦耕くうこうするに

何如高臥東牕

何なんぞ如しかん 東窓とうそうに高臥こうがするに

※ 封侯萬戸 食邑が一万戸ある貴族にとりたてられる。後の注を参照。

※ 立談 りつだん 立ち話。漢の揚雄ようゆうの「解嘲かいちゆう」に、「或いは七十（人の君主）に説くも遇わず、或いは立談して侯に封ぜらる」とある。

※ 賜璧 「史記・范雎伝はんきょでん」に、「虞卿、屨きょく（履物）を躡ふみ簪かんを担かう。一見して趙王、白璧一双・黄金百鎰いっぴつを賜い、再見して、拜して上卿と為り、三見して卒ついに（幸）相の印を受け万戸侯に封ぜらる」とあるのを指す。璧は玉の一種。

※ 耦耕 ぐうきやう 兩人がならんで耕すこと。これは「論語・微子篇」にある長沮ちやうそと桀溺けつてきの話^{を指す}。くわしくは「皇甫岳雲谿雜題五首」第四首「上平田」の注（四三ページ）を参照。

君主に二度会ったばかりで、万戸侯にとりたてられる。

また君主にちょっと話しただけで、璧一双を賜る。それも人生だが、南の畠ちやうそで、あの長沮ちやうそと桀溺けつてき式に耕し、

東の窓の下で、枕を高くして横になるのにまさりはすまい。

採菱 渡頭 風急
菱ひしを採とれば 渡頭とどうに風急かぜきゆうなり
策杖 村西 日斜
杖つえを策つけば 村西そんせいに日ひは斜ななめなり

杏樹壇邊漁父

杏樹壇辺の漁父きやうじゆだんへん ぎよほ

桃花源裏人家

桃花源裏の人家とうかげんり じんか

※ 渡頭 渡し場のほとり。

※ 杏樹の句 杏の樹のある一段と高くなつた処にいる漁夫、ということだけれど、これには故事がある。「莊子

雜篇・漁父」に、「孔子、緇帷の林に遊び、杏壇（沢の中の高処とも壇名ともいう）の上に休坐す。弟子は書を読み、孔子は絃歌して琴を鼓す。曲を奏すること未だ半ばならざるに漁父有り、船を下りて来る。鬚眉、交に白く、髪を被り袂を揄れ、原を行きて以て上り、陸に拒りて止まる。左手は膝に抛り、右手は頤を以て聴く」とあり、あとで、孔子は謹んでこの隠れた賢者である漁父に教えを乞うた。

※ 桃花源 桃の花咲く水源にあつたという理想境。晋の陶淵明の「桃花源記」に詳しい。（本選集「陶淵明」一四一ページ参照）

菱を採れば、渡し場のあたりに風がはげしい。

散策すれば、村の西に夕日が傾むく。

漁夫あれば、杏の樹のある高みにて、孔子に道を教えしという、漁父を偲び、

田家あれば、桃花水源の暮しを思う。

萋萋芳草秋緑
落落長松夏寒
牛羊自歸村巷
童稚不識衣冠

萋萋たる芳草 秋緑に
落落たる長松 夏寒し
牛羊 自ずから村巷に歸る
童稚 衣冠を識らず

※ 萋萋 草の生え茂るさま。

※ 落落長松 高くそびえた松の大木。晋の孫綽の「天台山に遊ぶの賦」に、「萋萋たる織草を藉き、落落たる長松に蔭す」とあり、六臣注に、「萋萋は、草の美なるさま。落落は松の高いさま」とある。

※ 夏寒 齊の王巾の「頭陀寺の碑文」に、「桂は深くして冬燠に、松は疎にして夏寒し」とあるのによつた。

※ 自歸 自は、拘束されない意。

※ 衣冠 官吏が身につける衣と冠。役人の意。

匂いよき草は、秋も緑に生え茂り、
空高くそびえる松の大木は、夏なお寒い。

牛や羊は、村の道を勝手に帰り、
子供は、役人など知りもしない。

山下 弧烟 遠村
山 下 の 弧 烟 は 遠 村
天 邊 獨 樹 高 原
天 邊 の 獨 樹 は 高 原
一 瓢 顏 回 陋 巷
一 瓢 顏 回 の 陋 巷
五 柳 先 生 對 門
五 柳 先 生 門 を 對 す

※ 一瓢の句 「論語」に、「子曰く、賢なる哉回也、一簞の食、一瓢の飲。陋巷に在り。人、其の憂いに堪えず。回也其の樂しみを改めず」とある。

※ 五柳先生 晋の陶淵明を指す。「老将行」の注(33ページ)を参照。

※ 對門 まむかいの意。

山麓の遠くの村には、ひとすじの煙。

空のかなたには、一もとの樹のそば立つ高原。

人生を楽しむには、ひょうたん一ぱいの水で満足した顔さんの住むようなみすばらしい路地で結構。
五柳先生が、むかいにおいになる。

桃紅復含宿雨

桃の紅は復た宿雨を含み

柳緑更帶春烟

柳の緑は更に春烟を帯ぶ

花落家僮未掃

花落て家僮 未だ掃わず

鶯啼山客猶眠

鶯啼いて山客 猶お眠る

※宿雨 よいごしの雨。

※春烟 春のもやや霞のたぐい。

※家僮 少年の召使い。

紅く咲いた桃の花に、よいごしの雨が残っている。

柳の緑は、もやにかすんで一段と情趣深い。

花が散ったが、家僮はまだ掃かず、

鶯がのどかに囀るのに、山村の人はまだ目が覚めない。

酌酒會臨泉水

酒を酌みては会らず泉水に臨み

抱琴好倚長松

琴を抱きて好ざや長松に倚らん

南園露葵朝折

南園の露葵は朝に折り

東谷黄梁夜春

東谷の黄梁は夜春く

※ 泉水 自然の泉や流水。日本の庭園にこしらえた箱庭のような池ではない。

※ 露葵 「積雨輞川荘作」の注(3ページ)を参照。

※ 黄梁 穀物の一種。梁には黄梁と青梁と白梁の三種があり、黄梁が最も美味で、青梁が一番劣るといふ。

※ 春 穀物を白でつくこと。

酒は、泉水を眺めて飲むことにする。

琴を弾するのは、高い松の下こそ清清しい。

朝は、南の畠で、露にぬれた葵を折り、

夜は、東の谷でとりいれた、こよりよう黄梁をつく。

七言絕句

九月九日憶

九月九日 山東の兄弟を

山東兄弟

憶う

獨在異鄉爲異客

ひとり異郷に在つて 異客と爲る

每逢佳節倍思親

佳節に逢う毎に 倍々親を思ふ

遙知兄弟登高處

遙かに知る 兄弟高きに登る處

徧插茱萸少一人

徧ねく茱萸を挿して一人を少くを

※此の詩は「唐詩選」にも載っている。また吉川・三好両氏著「新唐詩選」にも見える。王維十七歳の時の作。多分、長安に遊学して、故郷を憶つて作ったものと推測される。因みに、彼が京兆府試(都で行われるブロックごとの文官試験名)に合格したのは、十九歳の時である。

※九月九日 旧曆。重陽の節句の日で、この日は「登高」といって、近くの小高い山や丘に登り、茱萸の実を頭にさして厄ばらいする習慣があった。

※山東 今の山東省あたりだけを指すせまい意味の場合と、昔、秦に対抗した崑函(函谷のこと)以東の六国(韓・魏・趙・燕・楚・齊)の土地全体をひっくりかかす場合とある。ここは後者の広い意味の場合で、河北、河南、山東などの一帯をいう。王維の出身地は太原(山西省)の祁で、のちに河東の蒲に移った。

※兄弟 彼には弟が四人あった。すなわち縉、縉、紘、紘であり、なかでも縉は、代宗皇帝(玄宗皇帝の二代)

あと)の時、宰相となったが、後世からは佞^{ねい}佞^{ねい}として非難された。尤も、この兄弟は、父方の従兄弟を含む、大きな兄弟の意であろう。

※ 佳節 重陽の日を指す。

※ 親 身うち。

※ 登高處 処は、・・・したとき、の意をも含む。場所のみを示すのではない。

※ 茱萸 しゅゆ。輞川集の「茱萸^{はま}汎」詩注(六〇ページ)参照。

ひとり見知らぬ土地に在り、見知らぬ旅人の身の上なので、秋の節句に逢うたびにますます家が恋しくなる。

いまごろ、きつと兄弟して小高い岡に上ったとき、

兄弟みんな頭に茱萸をさして、さて何ということなく、ひとり足りないことに改めて気づくだろうことが、遠くからでもよくわかる。

寒食汜上作

寒食^{かんしよくしじょう}汜上^{さいじょう}の作^{さく}

廣武城邊逢暮春
汶陽歸客淚沾巾
落花寂寂啼山鳥
楊柳青青渡水人

廣武城邊こうぶじょうへん 暮春ぼしゆんに逢あひ
汶陽がんまうの歸客ききやく 涙なみだ 巾きんを沾うるす
落花らくか寂寂せきせき 山やまに啼なくの鳥とり
楊柳ようりゆう青青せいせい 水みづを渡わたるの人ひと

※ この詩は、王維せいが濟州司倉參軍せいしゅうしきやうさんぐんに左遷させんされている時（開元九年—全二十一年？）の作であると北多尾氏は「王維詩評釈」で云われる。

※ 寒食 冬至後、百五日目すなわち陽曆の四月上旬の日を云い、三日間火を禁じて冷食する。時は晚春落花の頃、清明節の前日（前二日ともいう）に当り、好個の詩材として多くの詩人に題詠された。

※ 汜上しじやう 汜水のほとり。汜水は、洛陽東方の川名。

※ 廣武城 洛陽の東北、黄河のほとりに成臯せいさう県があり、成臯の近くに廣武城がある。むかし漢の高祖と項羽が、かわのをはさんで東西両廣武城をきずき相い対峙したという古戦場。

※ 汶陽歸客 王維自身を指す。汶陽とは、汜水山東省の陽きたの土地。

廣武城のほとりで、春の暮れを迎え、

汶陽ぶんやうに歸る旅人は、涙で手巾しゆきんをぬらしている。

花はひっそりと散り、鳥が山で啼いていて、
水を渡る人に、岸の楊柳が青い。

送別

送別

送君南浦淚如絲
君向南浦に送りて涙 糸の如し
君向東州使我悲
君は東州に向い我をして悲しましむ
爲報故人顛顛盡
爲に報ぜよ 故人は顛顛し尽くし
如今不似洛陽時
如今は似ず 洛陽の時にと

※南浦 南の水辺。梁の江淹の「別れの賦」に、「君を南浦に送って傷むこと之れを如何んせん」とあるのにもとづく。

※淚如絲 涙が絹糸のように乱れおちる。梁の武帝の詩に、「臉下に涙、絲の如し」とあるのにもとづく。

※東州 現在の山東・山西・河南・河北などの各省一帯をいう。「後漢書・樊準伝」に、「今、西屯の役有りと雖も、宜しく東州の急を先にすべし」とあり、唐の章懷太子の注に、「東州とは、冀・兗州を謂う」とある。冀州・兗州は何れも古えの九州（禹王の時、全国を九つに分けたという）の一。

※ 故人 旧友。王維自身を指す。

君を南の水辺へ送りゆけば、涙は千千に、糸の如くみだれおちる。

私に悲しみを与え、君は東州へ向かわれる。

あちらへ着いたら、どうかこう言っていただきたい、「君達の旧友である彼王維は、顛顛はて、今では、かつての洛陽時代とは似ても似つかぬよ」と。

與廬員外象過

廬員外象と崔処士

崔處士興宗林

興宗の林亭を過る

亭

緑樹重陰蓋四隣

緑樹の重陰 四隣を蓋う

青苔日厚自無塵

青苔 日に厚くして自のずから塵無し

科頭箕踞長松下

科頭にして箕踞す 長松の下

白眼看他世上人

白眼にして他の世上の人を見る

※ 此の詩は、「唐詩選」にも採られている。

※ 盧員外象、裴廸はいてきそれに弟の王縉おうしんと四人で崔興宗の多分、南山の別荘を訪れた時の作。

※ 廬象 盛唐の詩人。字は緯卿。劉禹錫りゅうしやくの「廬象集」の序に、「始め章句を以て開元中に振起し、王維・崔顥と比肩する云云」とある。員外は官名。員外郎のこと。「同崔員外秋宵寓直」詩注（一三七ページ）を参照。

※ 崔處士興宗 処士は官途につかず野に在るひとをいう。崔興宗は王維の母方の従兄弟。維よりも年少である。王維の母は崔氏の出で、崔興宗の名は、王維の集中にしばしば出てくる。

※ 科頭 唐の高宗皇帝の息子、章懷太子の「後漢書・東夷伝」注によれば、頭髮をぐるぐる巻きにすることだという。また、宋の楊伯岳がんの「臆乘」によれば、「俗に冠せざるを為すを科頭と謂う」とある。要するに奔放な格好である。

※ 箕踞 両足をなげ出して坐ること。「漢書・陸賈伝」注に、「尉佗、魑結つひけい（槌のような髪形）箕踞して陸賈を見る」とあり、唐の顔師古の注に、「箕踞は其の兩脚を伸して坐すを謂う」とあり、また、「箕踞は其の形、箕に似たり」とある。また、「晋書・阮籍伝」に、その母の葬式に附してのこととして、「裴楷、往きて之れを弔す。籍、散髮箕踞し、酔うて直視す。」とあり、第四句の白眼とともに、ここは阮籍の故事にもとづいているのだろう。

※ 長松 高くそびえる松。

※ 白眼 阮籍が俗士には白眼を以てのぞみ、好きな客には青眼を以て対した、という故事。

※ 看他 ここは「他の世上の人を見る」と読むべきで、他は現代中国語のその字の意味。他字を助字のように「看他す」と読むではない。

緑に茂る樹は、幾重にも枝をひろげて四方を蓋い、
地には青苔が日日に厚く苔むして塵埃もない。

ところで、この主人は、頭は丸だしのぐるぐる巻き、長松の下で両足をなげ出した晋の阮籍タイプ。
世の俗人どもを、白い眼で御覧になる。

歎白髮

白髮を歎す

宿昔朱顔成暮齒

宿昔の朱顔 暮齒を成す

須臾白髮變垂髻

須臾にして白髮 垂髻を變ず

一生幾許傷心事

一生幾許ぞ 心を傷ましむるの事

不向空門何處銷

空門に向わずんば何れの処にか銷さむ

※ 他にも同じ題の五言古詩が一首ある。

※ 宿昔 往昔。むかし。

※ 朱顔しゆがん 紅顔。若若しい顔。

※ 暮齒ぼし 暮年。老齡。

※ 須臾しゆゆ ちよつとの間。

※ 垂髻すいちよく 小兒の髪。

※ 空門 仏門。

※ 銷 消と同じ。とく。けす。

昔の少年は老人となり、

おかつば頭はあつというまに白髪しらかみとなつた。

短い一生に、どれほど心を傷めることがあることか。

仏教の空くうの悟りにむかう以外に、この傷心を消す処はない。

送元二使安西

元二げんじの安西あんせいに使用するつかいを送るおく

渭城朝雨裊輕塵
 客舍青青柳色新
 勸君更盡一杯酒
 西出陽關無故人

渭城いしじょうの朝雨あさのう 輕塵けいじんを裊なし
 客舍きやくしや 青青せいせいとして柳色りゆうしき 新あらたなり
 君きみに勸すすむ 更さらに尽つくせ一杯いつぱいの酒さけ
 西にしのかた陽關やうかんを出いづれば故人こじん無なからん

※ この詩は「渭城曲」として、「樂府詩集」に載せられている。「陽関曲」とも言う。一般に送別の詩として唱われ、第四句、陽関の句を反復して歌ったので、広く世に陽関三疊として知られる。尤も、どの部分を三疊するかについては色色異説がある。くわしくは明の伝芸蘅撰「留青日札」をみられたし。

※ 元二 元は姓で、二は兄弟の順序が二番目であることを示す。これを排行はいこうという。俗に、元二は、同時の詩人である元結だとするが、そうではあるまい。

※ 安西 都護府（辺境の諸国を統轄する役所）の置かれた処で、今の新疆省吐魯番の近くにあった。元二が勅命により、その安西都護府に出かけるのを見送って作った作である。

※ 渭城 長安の西北、渭水を北へ渡った所にある。

※ 輕塵 軽い土ほこり。

※ 客舍 旅館。

※ 柳色云云 中国では別離の際に、送者が柳の枝を手折ってはなむけにする習慣がある。従って別離と柳とは、切っても切れぬ関係があるので、「柳色新」を見入る気持も特別なものがあるわけである。

※ 陽関 関所の名。甘肅省の西方にある敦煌の更に西南方、新疆省との境にあった。宋の樂史撰「太平寰宇記」によれば、玉門関の南に位するので「陽の関」といったという。西域すなわち中央アジアへのルートである。

※ 此の詩は、吉川・三好両氏著「新唐詩選」にも見える。

渭城いじょうの朝の雨は、たちやすい埃をしつとり濡らし、

旅館りょくかんは、生きかえったような柳の緑で、空気までが青青とすがすがしい。

まあ君、もう一杯やり給え。

これから西へと出発し陽関を出れば、こうして飲みあえる友人もないのだから。

送沈子福歸江東

沈子福しんしふくの江東かうとうに帰るかえを送るおく

楊柳渡頭行客稀

楊柳ようりゆうの渡頭ととう行客かうきやく稀まれなり

罈師盪槳向臨圻

罈師こし槳かじを盪うごかして臨圻りんきに向うむこ

唯有相思似春色

唯ただ相そう思しの春しゆん色しよくに似にたる有あり

江南江北送君歸

江南江北こうなんこうほく 君が帰るきみがかえを送るおく

※ 此の詩は、「唐詩選」にも採られている。

※ 沈子福 人名。未詳。

※ 江東 広く江南一帯を指す。

※ 楊柳 別離と柳との関係は、「送元二使安西」詩の注（一〇七ページ）を参照。

※ 渡頭 渡し場のあたり。

※ 罟師こし 罟は網であり、罟師は、網打ちの漁師であるが、ここではすなわち沈をのせた舟の船頭。

※ 盪槳 かいをうごかす。槳は、かいの類。

※ 臨圻りんぎ 岸線の出入りの多い水ぎわ。劉宋の謝靈運の詩に、「圻きに臨んで參錯しんさくを阻とどつ」とあり、唐の李善の注

に、「埤蒼ひひに曰く、圻きは曲岸の頭なり。圻きは圻きと同じ」とある。尤も、喜多尾氏の「王維詩評釈」に言われるように、臨圻りんぎを臨沂りんぎ（地名。南京の南方にある江寧の近くにあったという）とするほうが、落着きがよい。

※ 春色 春景色。

※ 江南江北の句 普通に行われている解釈は、「私の君を思う情は春景色のようなもので、いま江南江北に春の至らざる処がないように、君を思う私の気持ちも、君を送ってついでつかない処はない。」というのである。然しながら一解として次のようにも考えられる。「私の君を思う情は春景色のようなもので、春ととも

に君の帰るのを送ってゆき、また春とともに江南から江北へと君を送って帰ってくる。」つまり「帰」は、君が帰ることと春が北帰することとの両方にかかれて見ると見るわけである。作者は勿論、沈子福の帰地からいって北方にいななければならない。此の詩は、別離といってもあまり深刻なものではないから、後解の如く軽い機智がこめられているのかも知れない。

柳の植わっている渡し場のほとりは、旅人が殆どないと見えて、渡し舟さえ見当たらず。
そこで網打ちの漁師に頼んで対岸に渡してもらおう。

(見かたによればあまり映えない送別だが、)ただ私の君を思う気持だけは春に似て、
江南、江北と春のいたらざるところなきがごとく、私の情も、君の帰るのを送ってゆかないところがない。

菩提寺禁、裴廸來相看、説逆
菩提寺の禁に、裴廸来りて相い看るに、逆賊等、凝碧池
賊等凝碧池上作音楽、供奉人
上に音楽を作し、供奉の人等声を挙げて、便わち一時に
等擧聲、便一時涙下、私成口
涙下ると説く。私かに口号を成し、誦して裴廸に示す。
誦、誦示裴廸。

※ 此の詩は、王維が安祿山に拘禁されていた時の作として知られる。

※ 菩提寺 長安の平康坊南門の東にあったという。

※ 禁 監獄。王維が賊のためにおしこめられている処。

※ 裴迪 王維の友人。「輞川集」の詩及び注（四八ページ）参照。

※ 逆賊等 安祿山一味を指す。

※ 凝碧池 唐の東の都、洛陽の禁苑にある池。

※ 供奉人 宮廷の樂士。

※ 擧聲 樂器の音を出す。

※ 口號 詩の体裁の一。口に随つて吟詠する意という。

※ 誦示 文字に記さず、口づてに示す。

※ なおこの時、王維と共に捕えられ、安祿山の官位を受けたものは、すべて罰せられたが、王維は此の詩のお陰で免れたという。また安祿山が凝碧池で宴した様は、「明皇雜錄」にくわしい。すなわち、「天宝末、群賊兩京（長安と洛陽）を陥し、大いに文武の朝臣及び黃門（宦官）、宮嬪（女官）を掠め、樂工、騎士、數百人を獲る毎に、兵仗を以て敵に衛り、洛陽に送る。山谷に逃るる者有るに至るも、而かも卒に能く羅捕迫脅し、授くるに冠帶（官位）を以てす。礫山、尤も意を樂工に致し、求訪すること頗る切なり。旬日にして梨園の弟子數百人を獲たり。群賊、困りて相い与に大いに凝碧池に会して宴す。偽官數十人、大いに御庫（天子の宝物庫）の珍宝を陳べ、前後に羅列す。樂既に作る。梨園の旧人（かつて玄宗皇帝直屬の歌舞音曲団員）、覺えず獻款（すすりなき）し、相い対して泣下る。群逆、皆な刃を露わし満を持し以て之れを脅かすも、已む能わず。樂工の雷海青なる者有り。樂器を地に投じ、西向（玄宗皇帝のいる方角）して

慟哭す。逆党（逆賊の一味）乃ち海青を戲馬殿に縛し、支解（手足をばらばらにする酷刑）して以て衆に示す。之れを聞く者、傷痛せざるなし。王維、時に賊の為に菩提仏寺に拘われ、之れを聞きて詩を賦す（云云）とある。

萬戸傷心生野煙

萬戸傷心 野煙生ず

百官何日再朝天

百官 何れの日か再び天に朝せん

秋槐葉落空宮裏

秋槐 葉落つ 空宮の裏

凝碧池頭奏管絃

凝碧池頭 管絃を奏す

※野煙 野のかすみ

※朝天 朝廷に出仕する。

※槐 えんじゆ。

かつての都の数万人の人家は、廢墟と化して野のかすみがち、見るものの心をいたましめる。

思えば、文武百官の再び天子に拝謁するは、いつの日であろうか。

秋の槐の葉は、主のない宮殿に散り、

賊徒は、洛陽宮の凝碧池で音楽を奏し、酒もりするという。

少年行三首

少年行 三首

※ 樂府すなわち歌謡の体裁である。生を軽んじ義を重んずる。勇み肌のいなせな若者が主題。

新豊美酒斗十千

新豊の美酒 斗十千

咸陽遊俠多少年

咸陽の遊俠 少年多し

相逢意氣爲君飲

相い逢うて意氣 君が為に飲む

繫馬高樓垂柳邊

馬を繫ぐ 高樓垂柳の辺

※ 新豊 長安の東北郊の都市。酒がうまいらしい。新豊という名から受ける感じは、我我がモナコという都市

から受ける感じに似ていようか。

※ 斗十千 一斗一万錢。魏の曹植の樂府に、「帰り来って平樂に宴す、美酒、斗十千」とある。

※ 咸陽 かつての秦の都。長安の西北方、渭水を北に渡った所。この詩は、時代を漢に借りたので、長安の代

わりに咸陽といった。

※ 意気 意気投合する。

※ 高樓 妓女のいる酒樓。

新豊のうまい酒は一斗について一万錢。

都には、生きのいい若者達が、うんといる。

街で出逢って気っ腑に惚れて、先ず一杯ときまっただか。

馬で酒樓のしだれ柳に繋いでいる。

出身仕漢羽林郎

出身しゅつしん漢かんに仕つかう羽林郎うりんろう

初遣驃騎戰漁陽

初はじめて驃騎ひょうきに随したがって漁陽ぎょやうに戦たたかう

孰知不向邊庭苦

孰たれか知しらん辺庭へんていに向むかって苦くるしまざるを

縦死猶聞俠骨香

縦たとい死しすとも猶なお聞きかん俠骨きようこつの香かしきを

※ 此の詩は、「唐詩選」にも採られている。

※ 出身 世に出てはじめて官途につく。後漢末の禰衡の「鸚鵡の賦」に、「女は家を辞して人に適く、臣は身を出して主に事う」とあり、唐の李善注に「漢書」を引いて、「鄧都曰く己に親に背きて身を出さず、固より当に職を奉ずべし」とある。

※ 羽林郎 近衛仕官。「後漢書・百官志」に、「羽林郎は宿衛・侍従を掌る。常に漢陽・隴西・安定・北地・上郡・西河の凡そ六郡の良家を選んで補す」とある。

※ 驃騎 漢の武帝の時の驃騎將軍霍去病のこと。霍去病は、武勲赫赫たる將軍である。吉川博士著「漢の武帝」を参照。

※ 漁陽 北京の東北方、万里の長城近くの地名。

※ 辺庭 辺境の役所か。

※ 俠骨香 遊侠の士としての気骨香しき名。晋の張華の詩に、「生きては命子の遊に従い、死しては俠骨の香を聞く」とあるのにもとづく。李白の「俠客行」にも、「縦え死すとも俠骨の香ばしく、世上の英たるに慙はず」とある。

※ 第三句第四句の意味、諸説紛紛としてよく判らない。1. 辺庭で苦戦して功もなく死すより、市井で命を全うして、死後、俠名の残るほうがよい、というのをたれ知ろう。この説は、横死に対して縦死を、生を全うする意にとる。(大典禪師・唐詩解頤) 尤も、縦死をこんな意にとるのは無理である。2. 辺庭で苦しみ、功なく死すより、たとえ市井に死しても俠名の残るほうがよいと、若者が後悔する。従軍の際には、ここに思い至らなかつた。(森槐南・唐詩選評釈) 3. 辺庭で死す者は、却って遊侠の若者として市井で死し俠名を得るのに及ばない事実を、たれ知ろうかと作者が傷む。(趙殿成・王右丞箋註) 4. 辺庭で苦

しみ戦死しても本望だ。人人はきつと死後、俠骨の香しきを聞くだろう。(喜多尾城南・王維詩評釈) 等等である。ここでは一応 4.に従って訳す。

世に出ては、近衛仕官として漢に仕え、

初めて驃騎將軍霍去病かくきよへいに従い漁陽で戦ったが、

辺境で苦しまないと誰にわかろう。

苦しんで、たとえ死してもなお死後に、男一匹我が骨つ節ぶしのたてる香りを人人は聞き知ろう。

一身能撃兩彫弧

一身いっしん能よ撃ひく兩彫弧りやうちやうこ

虜騎千重只似無

虜騎りよきの千重せんじゆう只ただ無なきに似にたり

偏坐金鞍調白羽

偏ひとえに金鞍きんあんに坐ざして白羽はくうを調ちようし

紛紛射殺五單于

紛紛ふんふんとして五單于ごせんうを射殺しゃさつす

※ 撃いしゆみ 弩こを手で引くこと。「漢書・申屠嘉伝」の顔師古注に、「今の弩、手を以て張る者を撃張はくと日いい、足を以て蹴けつむ者を蹶張けつと日いう」とある。

※ 彫弧ちやうこ 彫刻した木の弓(趙殿成の説)。弧は木弓。

※ 虜騎 敵騎。虜は蕃族の意。

※ 偏 いちずに。

※ 金鞍 きんあん 金が使つてある鞍。

※ 白羽 白羽を使つてこしらえた矢。漢の司馬相如の「上林の賦」に、「蕃弱（良弓の名）を彎ひき白羽を満たす（矢じりまでいっぱいにはひく）」とあり、文穎えいの注に、「白羽を以て箭やと為す。故に白羽と言ふなり」とある。

※ 紛紛 数多いさま。

※ 五单于 五人の匈奴の王。单于是、匈奴王の称号。「漢書・宣帝紀」に、「匈奴の虚閭權渠单于きよろけんきんぎよせんう、病死す。右賢王屠耆堂とくじどう、代わりて立つ。骨肉の大臣、虚閭權渠单于の子を立て、呼韓邪单于と為し、撃ちて屠耆堂を殺す。諸王、並びに自立し、分れて五单于と為り、更あら相あい攻撃す。死者、万を以て数う」とある。

二人張りの強弓を引きしぼる腕を持ち、

十重とえ、二十重たえととり囲む敵騎も無きがごとく、

小面憎くもただただ黄金こがねの鞍こせんうに坐つて白羽の矢をととのえるばかり。

ばった、ばったと五单于ぜんうを射殺する。

五
言
律
詩

送楊長史

赴果州

楊長史の果州に

赴むくを送る

褒斜不容幘

褒斜 幘を容れず

之子去何之

之子 去って何くに之く

鳥道一千里

鳥道 一千里

猿啼十二時

猿啼 十二時

官橋祭酒客

官橋 祭酒の客

山木女郎祠

山木 女郎の祠

別後同明月

別後 明月を同じくす

君應聽子規

君は 應に子規を聴くなるべし

※ 楊長史 楊は姓。長史は、地方官の官名。

※ 果州 地名。現在の四川州嘉陵江の流域にある。

※ 褒斜 褒も斜も共に谷名。現在の陝西省南部の褒城附近にある。唐の時の駅路にあたる。

※ 不容幘 狭くてほろのついた車が入らない。幘は、車のほろ。熱を防ぐ為につける。なお此の句は、梁の

庾肩吾（ゆけんご）の詩に、「長安に曲れる陌（みち）有り、曲陌（まがみち）嚙（か）を容れず」とあるのにもとづくのであろう。

※ 之子 この人。楊長史を指す。

※ 鳥道 大空を飛行する鳥の道。杜甫の詩に、「関塞、極天、唯だ鳥道」とある。本選集「杜甫上」（二六一ページ）参照。

※ 一千里 我が国の里数にして百六十里くらい。

※ 十二時 一日中の意。昔は一日を十二の時に分けた。

※ 官橋（かんきょう） 官路（くわんろ）（国道）にかかる橋をいう。使用例としては時代は下るが、元の劉誥（りゅうご）の「春日偶賦」詩に、「楊柳 輕寒水駅、棟（れん）（木名）花小雨官橋」とある。

※ 祭酒客 よく判らない。旅行の際は、道中の無事を願って、土を小さな山に盛り酒を供えて道祖神を祭り、おわれば車でひき去る習慣があったから、道祖神に酒を供えている人を指すのであろう。客は、見送りの人を指すと思われる。

※ 女郎祠 前記の褒城県の女郎山上に、女郎廟（びよらう）（霊を安置した建物）があり、俗に張魯（後漢末の人）の娘を葬ったものだという。なお女郎とは、男子に比すべき才能をもった女性をいう。日本の所謂「女郎」とは異なる。

※ 同明月 劉宋の謝莊の「月の賦」に、「美人邁（ゆい）て音塵（おんじん）闕（か）く、千里を隔てて明月を共にす」とあるのにもとづくのであろう。

※ 応 きっと・・・だろう。

※子規 ほとどぎす。楊長史が、これから行くところとする蜀（四川省）の地方に多く住む鳥。一名杜鵑ともいい、また杜宇ともいう。昔、荊州の人で鼈靈という人があつたが、死後その尸は川の流れをさかのぼり、文山というところまで行って生きかえり、蜀の国王であつた望帝（杜宇）に会つた。望帝は、彼を宰相にしたが、たまたま彼は、洪水を治めて大功があつたので、帝は、自分の徳が彼に及ばないと思ひ、帝位を譲つて他国に亡命した。のち、帝は死し、その魂は化して子規となり、蜀に飛来して血を吐きながら啼きつづけた。蜀の人には、それは望帝が「不如歸（帰るに如かず）、不如歸」と訴えているように聞こえたという。だからその鳴き声は、ひとしお旅先にあるものの肺腑をえぐる。

褒・斜の二つの谷は、幌馬車も通れぬというのに、

あなたは、ここを去って何処に行かれるというのだろうか。

それは、鳥が大空を飛んで行つても一千里。

そしてまた、一日中猿の鳴き声の絶えぬ路。

いまここ駅路の橋のほとりには、道中の無事を祈る見送り人の群れがあるが、

やがて旅するあなたには、山の樹木にかこまれた、あの女郎廟がわびしく待っていることだろう。

謝荘も言ったように、別れたのちは、明月より他にあなたとともにできるものはないが、

そのころあなたは、子規の聲に耳をかたむけ、故郷を想つて旅のこころをひとしお、かきたてられて
いることであろうか。

酬張少府

張少府に酬ゆ

晩年惟好靜
萬事不關心
自顧無長策
空知返舊林
松風吹解帶
山月照彈琴
君問窮通理
漁歌入浦深

晩年は惟だ靜を好み
萬事心に関せず
自ら顧て長策無く
空しく旧林に返るを知る
松風は解帶を吹き
山月は彈琴を照らす
君は窮通の理を問う
漁歌浦に入つて深し

※少府 官名。県尉のこと。県の長官を輔佐する官。

※長策 すぐれたてだて。

※舊林 前からなじんだ林。自分の古巣をいう。

※ 解帯 帯をゆるめてゆつたりする。自由人の姿。

※ 窮通 貧窮と栄達と。「莊子」に、「子貢（孔子の高弟）曰く、古の道を得る者は、窮するも亦た楽しみ、通するも亦た楽しむ。楽しむ所、窮通に非ざるなり。道、此れを得れば、則ち窮通して、寒暑風雨の序（秩序）を為すと」とある。

※ 漁歌 「楚辞・漁父」にある「滄浪歌」を指す。昔、楚の大夫であった屈原は、佞臣に讒言されて国を放逐された。彼は、やつればはて、江のほとりをさまよっていたが、一漁夫が追放されたわけを尋ねた。彼は言った、「世をあげて皆な濁り、自分だけが清んでいる。衆人は皆な酔い、自分だけが醒めている。だからなのだ。」と。漁夫が、「世が濁っているなら、それにうまく調子を合せて行けばよいのに。」と言うと、彼は、「髪を洗ったばかりのものは、冠むりのほこりを落してかぶるし、体を洗ったばかりのものは、着物のちりを払って着る。どうして潔白な体に、汚れたものをつけれようか。それくらいなら、いっそ湘の流れに投身して、江魚の腹中におさめられた方がましだ。」と。そこで漁夫は、にっこり笑って歌って去った。「滄浪の水清まば（世の中が清らかであるなら）、以て吾が纒（冠むりの紐）を濯うべし。滄浪の水濁らば、以て吾が足を濯うべし。」と。

※ 浦 水辺。海岸に限らず川にもいう。

晩年になってからは、ただ静かなのが好きで、すべてのことに関心がない。

自分でふりかえって考えてみても、世に処するすぐれた手だてはなくて、

古巢に帰るしかないのを、いたずらに知るばかり。

さてその古巢では、誰憚らぬくつろいだ体を、松風はそよそよと吹き、

琴をひけば、山月が清らかに照らす。

あなたは、俗世の窮達の哲理をお尋ねになるが、

あの漁夫の歌が、入江ふかく聞こえているではありませんか。

輞川閒居贈

裴秀才廸

輞川閒居 裴秀才

廸に贈る

寒山轉蒼翠

寒山かんざん轉うたた蒼翠そうすい

秋水日潺湲

秋水しゅうすい日ひ潺湲せんかん

倚杖柴門外

杖つえに倚よる 柴門さいもんの外そと

臨風聽暮蟬

風かぜに臨のぞんで暮蟬ぼせんを聴きく

渡頭餘落日

渡頭とととう 落日らくじつ余のこ

墟里上孤烟

墟里きより 孤烟こえんのぼ上のぼる

復值接輿醉

復また值せつ接輿よ醉いに値おう

狂歌五柳前

狂歌す 五柳の前まへ

※ 輞川 長安の南方、終南山に源を發する川名。このかわのほとりに王維の別荘、輞川荘があった。

※ 閒居 役所づとめをしないひまなくらし。ひまなすまい。

※ 裴迪 王維の友人。前に示すように王維と二人で輞川荘中の佳処を詩によりみあったので知られる。

※ 秀才 各地方毎に行われる文官試験の郷試に合格し、中央で行われる試験の受験資格者をいう。正式には進士、俗に秀才といい、自ずから稱するときは郷貢という(唐国史補)。

※ 寒山 冷気のただようひっそりした山。

※ 轉 かえつてますます。

※ 潺湲 水の音たてて流れるさま。

※ 柴門 粗末な門。

※ 聽 一般に積極的なきこうとしてきく場合に使う。聞は、きこえる場合に使う。

※ 墟里 村里。晋の陶淵明の詩に、「曖曖たる達人の村、依依たる墟里の烟」とあり、この句はそれにもとづいてい。本選集「陶淵明」二六ページ参照。

※ 接輿 春秋時代の楚の隱者。狂人のふりをして世を避けた。「論語・微子篇」に、「楚狂接輿歌いて孔子に過りていわく、鳳(孔子を指す)よ鳳よ、何ぞ徳の衰えたるや。往者は諫む可からず、来者は猶お追う可し、

「已んぬるかな。今の政に従う者は殆うきかな」とある。ここは接輿を裴廸になぞらえたものであろう。

※ 五柳 陶淵明の家のほとりに五本の柳が植えてあり、みずからちなんで五柳先生と称したこと、淵明の「五柳先生伝」に出ている。ここは王維自身、五柳先生に擬した。

ひっそりと冷気をただよわせた山あたりは、かえってますますみどりをふかめ、秋の川は、一日一日と澄んだころよい響きをたてて流れゆく。

杖により、粗末な門口で、

むかい風にそよそよ吹かれながら、暮れがたの蝉の声に耳を傾ける。

見れば、渡し場のあたりは、夕日の名残りに染まり、

村落には、ひとすじ、烟が立ちのぼっている。

ところでなんと、あの昔の楚の隠者、接輿先生のごとき君が酔っぱらい、

拙宅の前で、とんちんかんな歌を歌っているのに、またも出会ったことである。

使至塞上

使して塞上に至る

※ 此の詩は「唐詩選」にも採られていて、開元二十五年（七三七年）に王維が節度判官となり、涼州の崔希逸の幕中に赴いたときの作である。涼州といえ、長安から遙かに西北方にへだたった甘肅省にある辺境の地である。

單車欲問邊	單車	邊を問わんと欲し
屬國過居延	屬國	居延を過る
征蓬出漢塞	征蓬	漢塞を出で
歸鴈入胡天	歸雁	胡天に入る
大漠孤烟直	大漠	孤烟直く
長河落日圓	長河	落日円かなり
蕭關逢候騎	蕭關	候騎に逢えば
都護在燕然	都護	燕然に在りと

※ 單車 供も連れず、唯ひとり車に乗って。使用例としては、漢の李陵が蘇武に答えた書に、「足下、昔、單車の使を以て万乗の虜に適く」とある。

※ 問邊 使命を帯びて辺境を訪問する。

※ 屬國 本来は、中国に従属する国の意。「漢書・武帝紀」に、「匈奴の昆邪王、休屠王を殺し、其の衆を并せ

将い四万余人を合せて来降す。五属国を置きて以てこれに処らしむ」とあり、顔師古の注に、「凡そ属国と言う者、其の国号を存して漢朝に属す、故に属国という」とある。また、漢の蘇武が、典属国という官になったので、その意で使用することもある。杜甫の「秦州雜詩」に、「属国、帰ること何ぞ晚き」とあるのがそれである（本選集「杜甫上」六七ページ参照）。ここもそれで、「單車」も「属国」もともに蘇武の故事を引き己れに比したのであろう。

※ 居延 匈奴の地名。「漢書」に、「將軍霍去病、公孫敖、北地より出づること二千余里、居延を過ぎ、虜を斬首すること三千余級」とある。

※ 征蓬 風のまにまに吹き飛ばされる蓬（よもぎではないという）の如く、遠行定めなき出征者。ここは王維自身を指す。使用例としては、梁の呉均の詩に、「胡茄は屢々懐しくと訴え、征蓬は未だ還るを肯なわず」とある。

※ 漢塞 漢の城壁。漢を以て唐をいう。

※ 胡天 蛮地の空。胡は蛮族をいう。

※ 大漠 広大な砂漠。後漢の班固の「燕然山を封ずるの銘」に、「磧鹵を経、大漠を絶る」とあり、唐の李周翰の注に、「大漠は砂漠なり」とある。

※ 孤烟直 通信の煙がひとすじ、真直ぐ立ち上る。昔は遠方へ通信するのに、昼間は煙を利用した。宋の陸佃の「埤雅」によると、狼の糞を使えば、その煙は真直ぐ上り而も散ぜず、風が吹いても斜めにならないという。或いはまた、辺地には、つむじ風が多く、烟や沙が風に吹き上げられて真直ぐ上り、親しくその状態を見たものには、始めて「直」の字のよさがわかるという。

※ 蕭關 古来からの戦略上の要所。甘肅省にある。

※ 候騎 騎兵斥候。梁の何遜の詩に、「候騎 蕭關を出で、追兵 馬邑に赴く」とあるのにもとづくものか。

※ 都護 官名。辺境の政治及び軍事を統轄する長官。都は総の意で、定まった地域の護りを総べる意。唐には六大都護があつて、僻遠の諸国を統轄した。

※ 燕然 燕然山のこと。後漢の和帝の時、匈奴を破つたゆかりの場所。「後漢書」に「六月、車騎將軍竇憲、
鷄鹿塞を出で、度遼將軍竇鴻、柘楊塞を出で、南单于、满夷谷を出で、北匈奴と稽落山に戦い、大いに之を
破り、追いて和渠北靉海に至る。竇憲、遂に燕然山に登り、石に刻し功を勒して還る」とある。

かつての蘇武のように単身、辺境を訪れんとして、

辺地の官吏たる自分は、居延国を通りすぎる。

風のままに転び飛ぶ蓬のごとき身は、ここに漢のとりでを出で、

仰げば北へ帰る雁は、胡の空へと飛びゆく。

果てしない大砂漠には、狼煙がひとすじ高く立ちのぼり、

どこまでも流れゆく河の彼方に、沈みゆく日がまるい。

蕭關で物見の騎馬に出会い、様子を尋ねると、

わが目指す都護の將軍は、今やはるか燕然山のほとりにおられるということだ。

從岐王過楊氏

別業 應教

楊子談經所
淮王載酒過
興闌啼鳥換
坐久落花多
逕轉迴銀燭
林開散玉珂
嚴城時未啓
前路擁笙歌

岐王に從まい楊やう氏の

別業べつぎやうを過とう 應教おうきやう

楊やう子し 經けいを談だんずる所ところ
淮わい王おう 酒さけを載のせて過とう
興きやう闌たけて啼てい鳥ちやう換かわり
坐ざ久ひさしゆらうして落らく花か多おし
徑けい轉てんじて銀ぎん燭しよく廻めぐり
林はやし開ひらいて玉ぎよく珂か散さんず
嚴げん城じやう 時とき未まだ啓かかず
前ぜん路ろ 笙しやう歌かを擁ようす

※ 岐王 睿宗皇帝えいそうの第四子で、玄宗皇帝の弟にあたる惠文太子、李範のこと。学を好み書にたくみであった。

文章の士を愛して貴賤を問わず礼をつくして待遇したという。

※ 過 わざわざでなく、途次に立ち寄るのに使う。

※ 別業 別荘。

※ 應教 諸王の命を奉じて作るものを、「應教」という。天子の場合は、「應詔」あるいは「應制」と称し、太子の場合は「応令」という。

※ 楊子 漢の学者、揚雄先生。ここは、単に同姓ということで楊氏をなぞらえた。最初の二句は、五分の礼儀と五分の諧諷。

※ 淮南王 漢の淮南王劉安のこと。彼は学術を好み、すぐれた人物を招き、その数、百をもって数えた。有名な「淮南子」は彼の編集したものである。ここは、岐王を淮南王になぞらえた。

※ 載酒 揚雄は貧乏で酒好きだった。従って弟子は多くなかったが、物好きな人が酒肴を礼物にしてその門に学んだという。ここは、その故事に因んである。

※ 興闌 楽しみが終りに近づく。

※ 玉珂 くつわの所につける玉でできた馬飾り。動揺するとぶつかりあって音を発する。「同崔員外秋宵寓直」詩の注（一三七ページ）を参照。

※ 嚴城 夜警などある治安のゆきとどいた城。梁の何遜の詩に、「禁門、儼げんなること猶お閉ざすがごとく、嚴城、方に夜を警む」とある。

※ 擁 とりまく。ひしめく。

いまよようゆううの揚雄先生が、古典を講義されるお邸へ、

当代の淮南王劉安さまが、酒肴を授業料として、お立ち寄りなされた。

楽しみが終りに近づくにつれ、色色な鳥が入れかわつては、自慢ののどをきかせ、
つい長坐した間に、散った花のなんと多いこと。

きらきらかがやく銀のともしびの後について、こみちをまわり、
林の開けた処で、馬飾りの玉の音ねもさわやかにお暇した。

夜警きびしき城門は、まだ時が来ず開かないが、

路のむこうでは、まだ宴会気分のぬけない儀仗兵の、笛の音や歌声が、ひしめいている。

偶然作

偶然くうぜんの作さく

老來懶賦詩

老おい来きたりて詩しを賦ふするに懶もろうく

惟有老相隨

惟ただ老おいの相あい隨したごう有あり

宿世謬詞客

宿しゆく世せ、詞客しきやくに謬あやまらる

前身應畫師

前ぜん身しんは応まよに画師がしなるべし

不能捨餘習

余習よしゆうを捨すつること能あたわず

偶被世人知

偶たま々世人たまたませいじんに知しらる

名字本皆是

名字めいじは本もとより皆みな是ぜなるに

此心還不知

此この心こころは還かえつて知しられず

※ 此の詩は、「偶然作」と題する六首中の最後にあたり、第三句・第四句が有名で、よく画評などに引かれる。例えば、明末の書家であり画家であった董其昌とうきしやうの画評に言う、「右丞の詩に云う、宿世謬詞客、前身應畫師と。余謂おもえらく、右丞、雲峰石迹、廻かに天機より出で、筆思縦横、造化に參す。唐以前に安くんぞ此の画師有るを得んや」と。なお趙殿成は此の詩を古詩に入れているが、ここでは律詩と見なした。

※ 賦詩 詩を作る。

※ 宿世しゆせい 前世のこと。仏教でいう、前世・現世・来世の所謂る三世の一。

※ 謬詞客 本来、詞客でないのに間違つて詞客であった。詞客は、詩文を作るのに長じた人。

※ 前身 宿世と同じ意。前世の身。

※ 餘習 前からの継続としての習慣。ここは、詩文を作ったり、画をかいたりすることを指す。

※ 偶被の句 偶は偶然の意で、謙遜の辞。偶然にも世人に、詞客・画師として名を知られたの意。ところで、この句末と最後の句末とは、どちらも同じ韻字「知」が使つてあるが、韻字に同じ字を使うことは強く忌まれるので、普通には殆どないことである。よつて趙殿成は、両「知」字のうちどちらかに誤字があるの

ではないかと疑っている。

※ 名字めいじの句 名字めいじは、名あざなと字あざな。則すなわち「維い」と「摩詰まきつ」をいう。字の摩詰は、「維摩詰いむじ」に因んでつけたという。(解説一六ページ参照) 従つてこの句の意は、詩や画などで、偶然にも世人に名を知られたけれど、それは自分としては本来の姿ではなく「維摩詰」に因んでつけた名と字が、本来の自分の正しい姿をあらわしているのだ、の意。

※ 此心の句 余習のほうでは知られたが、本来の自分の心はかえって知られない。「此心」というのは、仏道への志を意味するのであろうか。

年をとつてくると、詩を作るのがものうい。

つきまどうのは、ただ老いだけ。

前世は、あやまって文人であつたのか、

また前身は、きつと画人であつたのだろうか。

前世からの因縁か、まえまえからの習慣を捨てきれず。

偶然にも、世の人に名を知られたが、

本来正しいのは、名あざなと字あざなの維いと摩詰。

維・摩詰という名と字のこころのほうは、かえって人に知られない。

同崔員外

秋宵寓直

崔員外さいいんがいと同じく秋あきの

宵よるに寓直ぐうちやくす

建禮高秋夜

建禮けんれい 高秋こうしゅうの夜よる

承明候曉過

承明しょうめい 曉あかつきを候こうして過すぐ

九門寒漏徹

九門きゅうもん 寒漏かんろう徹てつし

萬井曙鐘多

萬井ばんせい 曙鐘しよしゅう多おほし

月迴藏珠斗

月つきは迴かがやきて珠斗しゆとを藏ぞうし

雲消出絳河

雲くもは消きえて絳河こうかい出いづ

更慚衰朽質

更さらに慚はず 衰朽すいきゆうの質しつの

南陌共鳴珂

南陌なんばくに鳴珂めいかを共ともにするを

※ 崔員外 員外郎である崔という人。員外郎とは、郎中に次ぐ官で、中央の各省の事務官。もともとは定員外
の官という意である。

※ 寓直 禁中に宿直すること。寓は寄の意で、本来は晋の藩岳の「秋興の賦」の序に、「予、春秋三十有二。始
めて二毛（黒白の二毛）を見る。太尉の掾を以て虎賁中郎將を兼ね、散騎の省に寓直す」とあるように、
虎賁中郎將には役所がなかったたので散騎の役所に間借りして宿直する意である。

※ 建禮 漢の建礼門のことで尚書省を指す。「宋書・百官志」に、「漢の尚書寺（寺は本来、官庁の意。お寺ではない）は、建礼門内に居す」とあり、また「漢官儀」に、「尚書郎は文書の起草を主どり作り、昼夜、五日を建礼門内に更直す」とある。

※ 高秋 天高き秋。

※ 承明 漢の承明廬のこと。宮中の著作を司る場所をいう。後漢の班固の「西部の賦」に、「又た承明・金馬の著作の庭有り」とあるのに、もとづくのであろう。また「後漢・嚴助伝」に、「君は承明の廬を厭う」とあり、注に、「承明廬は石渠閣外に在る。直宿（宿直）して止まる所を廬と曰う」とある。「建礼」も「承明」も何れも直接に名指さず、漢宮の建物名を借用して典雅に述べたのである。

※ 候曉過 夜明けを待ちながら時を過す。

※ 九門 天子の九重の門をいう。ここは禁中の意。「礼記・月令」に、「季春の月云云、九門を出づること母し」とあり、漢の鄭玄の注に、「天子の九門なる者は、路門なり、応門なり、雉門なり、庫門なり、臯門なり、城門なり、近郊門なり、遠郊門なり、関門なり」とある。

※ 寒漏徹 肌寒さを感じさせる水時計の時刻の知らせが、ひびきとおる。

※ 萬井 井の字のように縦横整然たる街の区劃。

※ 曙鐘 夜明けの鐘。梁の庾肩吾の詩に、「風は長く曙鐘近し、地は廻かに洛城遙し」とある。

※ 藏珠斗 珠斗は、真珠を貫いたような北斗七星。趙殿成の注に、「斗星の相い貫けること珠の如きを謂う」とある。藏は、月光が明らかで、北斗の光が消えて見えないのをいう。

※ 絳河 天あまの河のこと。「初学記」に、「天河は亦た絳河と曰いう」とある。

※ 衰朽質 衰すいえ朽きゆうちた体。おいぼれの身。

※ 南陌 南なんのまぢ。

※ 共鳴珂 肩をならべる。行動を共にすることをいう。珂は、馬のくつわの所につける飾りで、貝や玉などで作る。単に形を奇麗にする為だけでなく、こころよい音を響かせる為でもある。馬が進めば珂が音をたてるので鳴珂という。梁の何遜かそんの詩に、「林を隔てて行轡けいを望み、坂を下って鳴珂を聴く」とある。また「旧唐書・輿服志」に、「馬珂は、一品下は九子、四品は七子、五品は五子」と記され、「爾雅翼」には、「旧大なる者、珂を為つくる。皮は黄黒色にして其の骨は白く、以て馬に飾るに可よし」とある。

建礼門の天高きさわやかな秋の夜、

承明廬で夜明けを待ちつつ時を過ごす。

宮中には、ひえびえと水時計の時刻の知らせが、ひびきとおり、

広い都の街街には、暁を告げる鐘の音が、あまた鳴り響いている。

月が皎皎と冴え渡り、真珠をつらぬいたような北斗七星は、姿をひそめ、

雲が消えて、天の河があらわれた。

思えば、朽ち衰えた身で、

南の街に肩をならべ、あなたとともに鳴珂を響かせるのが、あらためてはずかしく思われる。

秋夜獨坐

秋夜獨坐

獨座悲雙鬢
空堂欲二更
雨中山果落
燈下草蟲鳴
白髮終難變
黃金不可成
欲知除老病
惟有學無生

ひとり坐して双鬢を悲しむ
空堂 二更ならんと欲す
雨中 山果落ち
灯火 草虫鳴く
白髮 終に變じ難く
黄金 成す可からず
老病を除くことを知らんと欲せば
惟だ無生を学ぶ有り

※ 悲雙鬢 両側の耳のあたりの毛が白くなったのを悲しむ。

※ 空堂 ひっそりした部屋。

※ 二更 午後十時。

※ 草蟲 きりぎりすの類。「詩経・召南」に、「嘒嘒（しやうしやう）鳴声）たる草虫」とある。本選集「詩経国風上」（六八ページ）を参照。

※ 黄金の句 黄金は、金丹（不老不死の仙薬）のこと。ゴールドではない。梁の江淹の「建平王に從って紀南城に遊ぶ」詩に、「丹砂は信に学び難く、黄金は成す可からず」とある。

※ 老病 老いにもなう病。

※ 無生 仏道修行における窮極の境地であろう。「魏書・釈老志」に、「凡そ其の経旨は大抵、生生の類は皆な行業に因って起るを言う。過去・当今・未来有り、三世を歴るも識神、常に減せず。凡そ善悪を為さば必ず報応有り。勝業を漸積（だんだんと積み重ねる）し粗鄙を陶冶（とうや）し、無数の形を経、神明を藻鍊し（心を修練し）、乃ち無生を致して仏道を得る」とある。

ひとりぼつんと坐っていると、両鬢に白いものまじってくるのが悲しくなる。

ひどけ
人気のない、ひっそりした座敷は、もう十時に近い。

雨にまじって、山の木の実の落ちる音がする。

あかり
灯の下では、きりぎりすが鳴いている。

しらが
白髪となったら最後、もう黒くはならぬ。

また江淹の嘆くように、不老不死の金丹をつくるのもできない相談だ。

老病を除くてだてが知りたいなら、

ただ仏教の要諦、無生を学ぶしかあるまい。

酬虞部蘇員外

虞部蘇員外の藍田別業を

過藍田別業不

過られ、留まられざるの

見留之作

作に酬ゆ

貧居依谷口

貧居 谷口に依り

喬木帶荒村

喬木 荒村を帶る

石路枉迴駕

石路 枉げて駕を迴らす

山家誰候門

山家 誰か門に候す

漁舟膠凍浦

漁舟 凍浦に膠し

獵火燒寒原

獵火 寒原を燒く

惟有白雲外

惟だ有り 白雲の外

疏鍾聞夜猿

疏鍾 夜猿を聞き

※ 虞部蘇員外

虞部員外郎の蘇という人。虞部員外郎とは、植樹・植林・薪炭・狩獵等を掌る。「旧唐書・職官

志」に、「工部に虞部員外郎一員有り、従六品上」とある。

※ 藍田別業 輞川莊のこと。藍田は長安の東南に当る。

※ 石路 岩石の突き出ていたりする路のことか。

※ 枉迴駕 わざわざお出で下さる。

※ 候門 門に候つ。門に出迎える。

※ 膠 にかわでくつついたようになる。

谷のほとりのあばら家。

雲つく樹樹にとりまかれた、わびしい村なのに、

不便な岩みちを、わざわざお立ち寄り下さいました。

山家のうえに、出迎えも満足な者がいなかったことでしょう。

漁舟は寒さで、水辺にちぢかんでいますし、

野もさむざむとして、巻狩りの火に焼かれている始末です。

あるものとしては、ただ白雲の彼方の、

間遠な鐘の音と、夜の猿の声とだけで、何のおもてなしもできず、誠に失礼いたしました。

山居即事

山居即事 さんきよそくじ

寂寞掩柴扉

寂寞せきぼくとして柴扉さいひを掩おほい

蒼茫對落暉

蒼茫そうぼうとして落暉らくきに對たいす

鶴巢松樹徧

鶴つるは松樹しょうじゆに巢すくうて徧あまねく

人訪葦門稀

人ひとの葦門ひつもんを訪おとずれること稀まれなり

嫩竹含新粉

嫩竹どんちく 新粉しんぶんを含ふみ

紅蓮落故衣

紅蓮こうれん 故衣こいを落おす

渡頭燈火起

渡頭ととう 燈火とうか起おこ

處處採菱歸

処処しよしよ 菱ひしを採とつて歸かえる

※ 即事 目前にあるがままを詩に詠む意。

※ 寂寞 しづけさが隅隅まで支配しているさま。

※ 掩柴扉 柴扉は、しばの戸びら。粗末な戸。掩は、しめる。

※ 蒼茫 日がかげりを帯びてかぎりなくひろびろしているさま。北周の庾信の詩に、「日は荒城の上りに晩れ、

蒼茫として落暉ちつみや余のこる」とあるのにもとづく。

※ 落暉 落日のひかり。

※ 徧 どの松にも鶴が巢すくくつている意。

※ 葦門ひつもん 粗末な門。「左伝・襄公十年」に、「葦門葑門閨けいとう竇どうの人（貧しい人）」とあり、晋の杜預とよの注に、「葦門ひつもんは柴門なり」とある。また「礼記」に、「葦門葑門圭けいとう竇」とあり、漢の鄭玄ていげんの注に、「葦門は荊竹しんちくもて織りし門なり」とある。

※ 嫩竹ぬんちく わか竹。

※ 紅蓮こうれんの句 庾信ゆしんの詩に、「蓮浦 紅衣を落す」とあるのにもとづく。

※ 渡頭とせう 渡し場のあたり。

※ 處處 あちこち。

静けさのみちみちた自然の中で、柴の門を閉じる。

ひろびろとした天地の中で、夕日とむかいあう。

どの松にも、鶴が巢をこしらえ、

あばら家には、訪れる人が滅多にない。

見れば、若竹に新しく粉をふき、

紅い蓮は古い花びらを落した。

夜ともなれば、渡し場のあたりに灯がついて、

あっちこっちもみんな、菱を採って帰る村人たちでにぎやかだ。

送梓州李

梓州ししゅうの李使君りしきんを

使君

送おく

※ 梓州ししゅうの長官たる刺史となつて赴任する李氏を送る詩。梓州は四川省にある。使君は刺史に対する敬称。

萬壑樹參天

萬壑ばんがく樹き天てんに參さんし

千山響杜鵑

千山せんざん杜鵑とけん響ひびく

山中一半雨

山中さんちゆう一いっ半ぱんの雨あめ

樹杪百重泉

樹杪じゆびよう百重ひやくちゆうの泉いずみ

漢女輸幢布

漢女かんじよは幢布とうふを輸しゆし

巴人訟芋田

巴人はひとは芋田うでんを訟しやうせん

文翁翻教授

文翁ぶんおう翻かえつて教授きやうじゆす

不敢倚先賢

敢あえて先賢せんけんに倚よらざらんや

※ 萬壑 すべての谷。

※ 參天 空にまじわる。

※ 千山 すべての山。

※ 杜鵑 とけん ほととぎす。「送楊長史赴果州」詩注（二二三ページ）参照。

※ 一半雨 山が深いので晴雨が相い半ばすること。「一夜雨」に作る本もあるが、明みんの錢謙益は「一半雨」が佳いという。尤も「一夜雨」の方が自然な気もする。

※ 樹杪 じゆびよ 樹樹の梢。

※ 漢女 四川省の北方の漢中地帯の蛮族の女。

※ 輸幢布 物納の税として幢布とうふを納める。「晋書・食貨志」に「夷人（未文化人）の布を輸實しゆそく（税として納める）すること、戸に一匹。遠き者は或いは一丈」とある。幢布は蜀の特産布。晋の左思の「蜀都の賦」に、「布に幢花有り」とあり、注に、「幢華は樹の名。幢は、其の花柔毳じゆま（やわらかい）にして績ひぎて布と為す可し、永昌に出づ」とある。

※ 巴人 はひと 蜀の三巴の未開族の男子。三巴は巴郡・巴東・巴西をいう。漢女といい、巴人といい何れも李氏の任地の人人をいう。

※ 芋田 うでん いも畠。蜀はまた、芋の産地として知られる。

※ 訟 訴える。いも畠に関するいざこざを訴訟する。

※ 文翁 漢代に蜀を治めた良吏。「漢書・文翁伝」に、「文翁は廬江、舒の人なり。蜀郡の守と為り、仁愛にして教化を好む。蜀の地、僻陋にして蛮夷の風有るを見る。文翁、之れを誘進せんと欲す。是れ由り大いに化す。蜀の地、京師に学ぶ者、齊・魯に比す」とある。

※ 翻 (未文化の状態を) 逆に (文化の状態へと) 教化する。

※ 不敢 趙殿成は、敢不の意とする。従って「敢えて先賢に倚らざらんや」と読むわけである。恐らくそうなのであろう。

※ 先賢 文翁を指す。

すべての溪には、大木が空をつき、

山また山は、けたたましい杜鵑ほととぎすの声がこだまする。

山脈の半ばは雨で、その際は、

樹樹の梢から、百の泉が重なり落ちる。

さて任地では、蜀の蛮女たちは、特産の幢布とうふを納め、

三巴の未開の男どもは、芋畠のことで、もめごとを持ちこもう。

かつて文翁は、この土地の蛮風を教化され、かえって高い文化を誇れるようにした。
あなたの治政も、必らずや、この先賢にならわれるだろう。

過香積寺

香積寺を過こ

不知香積寺
數里入雲峰
古木無人逕
深山何處鐘
泉聲咽危石
日色冷青松
薄暮空潭曲
安禪制毒龍

知らず 香積寺
數里 雲峰に入る
古木 人徑無し
深山 何処の鐘ぞ
泉聲 危石に咽び
日色 青松に冷かなり
薄暮 空潭の曲
安禪 毒竜を制す

※ 香積寺 長安の南、終南山脈中にある寺の名。なおこの詩は、「文苑英華」では王昌齡（盛唐の詩人）の作となつてゐる。

※ 危石 高くきりたち上部のつき出た岩。

※ 安禪 座禪して雑念を去ること。

※ 毒龍 心中に生ずる妄念にたとえた。顧可久本の注に、「群竜が男女に化け、沙弥がその女に見とれたりすると怒って、ひきさらって行こうとする。そのとき師の教戒を念ずると、間もなくひきさがり、毒を井戸の中に吐いた云云」とある。なお此の詩は、吉川・三好両氏著「新唐詩選」にも見える。

話に聞く香積寺は、何処にあるとも知らず、

雲のかかる峰峰に数町も分け入ったが、

人のかようこみちはとだえ、年へし古木が鬱蒼と立ち並ぶ。

山のおくふかく、何処かで鐘がなる。それをめあてに更に進めば、

泉は、きりたった岩に澄んだ響きをたて、

日光は、さえざえと松のみどりに冷やかである。

気がつくつと、うす暗がりの人気ない潭のかたすみに、

ひっそりと、心頭を滅却した坐禪の僧がいた。

観 獵

観 獵

風勁角弓鳴
將軍獵渭城
草枯鷹眼疾
雪盡馬蹄輕
忽過新豐市
還歸細柳營
回看射鵬處
千里暮雲平

風勁かぜつよくして角弓かくきゆう鳴り
將軍しょうぐん渭城いじょうに獵りようす
草枯くさかれて鷹眼ようがん疾はやく
雪尽ゆきつきて馬蹄ばてい輕かろし
忽たちまち新豐しんほうの市しを過すぎ
還また細柳さいりゆうの營えいに歸かえる
鵬ちようを射いし処ところを回看かいかんすれば
千里せんり暮雲ぼうん平たいらかなり

※ 此の詩は「唐詩選」にも採られている。また吉川・三好両氏著「新唐詩選」にも見える。

※ 角弓 角で飾った弓。

※ 渭城 長安の西北、渭水の北にある。

※ 鷹眼 鷹は、獲物を探させるのに使う。

※ 忽 ふと気がついてみると。

※ 新豐市 新豐は長安の東北にある近郊都市。市は、まち。

※ 細柳 やはり長安の西北にあった近郊地。細柳と新豐との距離は、大体京都と堺くらい離れていると思えば

よい。

※射鵬 鵬は猛禽で鷲の類。北斉の有名な將軍斛律光が、かつて文襄王に従って獵に行き、雲外に大鳥を認め、たのでこれを射ると、丁度頸に当り、車輪のようにくるくる廻って落下した。見るとそれは鵬であったという。つまり詩中の將軍を暗に斛律光になぞらえているのだろう。

強い風に鳴る角弓。

將軍は、涓城で獵を始め。

すぐれた草原に、獲物をねらう鷹の眼はきらきら。

雪の消えた乾いた原野に、疾駆するひづめの音は軽ろやか。

忽ち新豊の町を駆けすぎ、

また細柳の兵營に引き返す。

かの大鷲を射止めたあたりを、ふりかえれば、

果てしない千里の曠野に、夕暮れの雲がたれこめている。

春中田園作

春中田園しゅんちゅうでんえんの作さく

屋上春鳩鳴
村邊杏花白
持斧伐遠揚
荷鋤覘泉脈
歸燕識故巢
舊人看新曆
臨觴忽不銜
惆悵遠行客

屋上おくじょう 春鳩しゆんきゆう鳴なき
村邊そんぺん 杏花きやうか白しろし
持も斧おのをもちちてて遠揚えんようをを伐きり
鋤すきをを荷にひないてて泉脈せんみやくをを覘うかむ
歸燕きえん 故巢こそうをを識しり
舊人きゆうじん 新曆しんれきをを看みる
臨觴しんしょうにに臨しんでで忽たちちま御ぎよせせず
惆悵ちゆうちやう 遠行えんこうのの客きやく

※ 趙殿成は此の詩を古詩に入れていますが、ここでは律詩と見なした。

※ 春中 春の半ば、つまり仲春。旧曆の三月、劉宋の謝靈運の「逸民の賦」に、「蕭条たる秋の首め、葳蕤たる春の中ば」とあり、「史記・秦始皇本紀」に、「時は中春に在り」とあって、正義に、「中は音仲」とある。

※ 屋上の句 魏の曹植の詩句、「春鳩、飛棟に鳴く」にもとづくのである。

※ 持斧の句 遠くに伸びていて手の届かない枝を、斧で切る。この句は「詩経・豳風」に、「蚕月条桑、彼の斧斨を取り、以て遠揚を伐る」とあるのにもとづく。「遠揚」については毛伝に、「遠は枝遠きなり、揚は条の揚るなり」とあり、唐の孔穎達の正義に、「遠は枝の遠きなり」というは、長枝の人を去ること遠きを謂うなり。揚は条の揚るなりというは、長条の揚起せるを謂うなり。皆な手の及ばざる所、故に枝は此れを

落して其の葉を採取す」とある。

※ 泉脈 せんみやく 地下水の道すじ。齊の謝朓ちようたうの詩に、「壤つちを察して泉脈を見、星うかがを窺うかがつて農の正しきを視る」とあるのにもとづく。

※ 舊人 古くからいる人。王維自身を指す。「書経・盤庚ばんかう」に、「古え我が先王も亦た旧人を任じて政を共にせんと惟おもい図る」とある。

※ 臨觴 盃にむかつて。觴は、さかずき。

※ 不術 (酒を) のまない。

※ 惆悵 ちゆうたう もの悲しいさま。

※ 遠行客 遠くへ旅立った人。

屋根の上で、春の鳩がのどかに鳴いている。

村には、杏あんずの花が白い。

斧で伸びた枝を切っている人、

また、鋤すまを担かついで地下の水脈をしらべている人がある。

燕が、もとの巢を覚えていて帰ってきたが、

年老いた自分は、新しい暦をながめ、

さかづきを手にして、ふと酒が飲めなくなった。
かなしいかな。はるかなる旅の友を想えば。

終南山

終南山 しゅうなんざん

太乙近天都	太乙 <small>たいいっ</small>	天都に近く	てんと <small>てんと</small> ちか
連山到海隅	連山 <small>れんざん</small>	海隅に到る	かいぐう <small>かいぐう</small> いた
白雲迴望合	白雲 <small>はくうん</small>	望を迴らせば合し	ぼう <small>ぼう</small> めぐ <small>めぐ</small> がっ <small>がっ</small>
青靄入看無	青靄 <small>せいあい</small>	看に入りて無し	かん <small>かん</small> い <small>い</small> な <small>な</small>
分野中峰變	分野 <small>ぶんや</small>	中峰變じ	ちゅうほうへん <small>ちゅうほうへん</small>
陰晴衆壑殊	陰晴 <small>いんせい</small>	衆壑殊なり	しゅうがくしゆ <small>しゅうがくしゆ</small>
欲投人處宿	人處 <small>じんじよ</small>	に投じて宿せんと欲し	とう <small>とう</small> しゆく <small>しゆく</small> ほつ <small>ほつ</small>
隔水問樵夫	水を隔てて	樵夫に問う	みず <small>みず</small> へだ <small>へだ</small> しよふ <small>しよふ</small> と <small>と</small>

※ 此の詩は「唐詩選」にも採られている。

※ 終南山 長安の南方につらなる山脈。単に南山ともいう。

※ 太乙 たいいっつ 終南連山中の最高峰の名。また星名。

※ 天都 てんと 「天子の都」の意と「天帝の都」の意と、両方をかけて使ったのであろう。天都は、もともと星の名。太乙が星の名なので、それと関聯させたわけである。「晋書・天文志」に「七星（星座の名）の七星（七つの星）、一名天都。衣裳文繡を主ると」あり、「河南、七星に入ること三度」とあるから、丁度南山に対応する星座なのであろう。

※ 到海隅 山脈の果ては、連綿と続いて海のほとりにまで到る。

※ 迴望合 高所よりふりかえって遠望すれば、白雲が合していて視界を遮る。

※ 入看無 青い靄が見えていたのに、そこに達すると無い。青靄は、青い山もや。

※ 分野 ぶんや 昔、王が天の星座の位置に応じて国を配当した。だから、或る土地に対応する星の分野が、それぞれあるわけである。「周礼・宗伯」に、「保章氏、天星を掌る・・・星土（星の主る土地）を以て、九州（全国）の地の封（境界）る所を弁ず。封城に皆な文星有り、以て妖祥を観る」とある。

※ 中峰變 一峰の中ほどで星の分野の所属が変わる意。つまり、それだけ山が広い意。

※ 陰晴 くもりと晴れ。

※ 衆壑殊 ひとつ、ひとつの谷によって異なる。壑は谷。衆は複数を示す。

※ 人處 人のいる所。

※ 樵夫しやうふ きこり。

太乙峰たいいつは、我が天子の都に近く、またその高いこと、天帝の都に接近するほどだ。

山なみは連なり連なって、その果ては海辺にまでつづくのである。

いま山中にあつて下界を見下ろせば、白い雲は密集して眺めを遮り、反対に、かかつていたはずの青い山もやは、来てみると見えない。

また同じ峰の中で、星の分野の所属が異り、

多くの溪は、陰くもったり晴れたり、それぞれみな氣象を異にしているという、かくのごとき雄大なる山中で、私は、人のいる処を尋ねあてて、一泊しようと思ひ、

谷川を挟んで、きこりにその場所を尋ねる。

山居秋暝

山居秋暝さんきしゆうめい

空山新雨後

空山くうざん 新雨しんうの後のち

天氣晚來秋

天氣てんき 晚來ばんらい秋あきなり

明月松間照
 清泉石上流
 竹喧歸浣女
 蓮動下漁舟
 隨意春芳歇
 王孫自可留

明月めいげつ 松間しょうかんに照り
 清泉せいせん 石上せきじょうに流る
 竹喧たけさわがしくして 浣女かんじよかえ帰り
 蓮動はすうごきて 漁舟ぎょしゆうくだ下る
 隨意ずいなり 春芳しゆんぼうの歌やむこと
 王孫おうそん 自ら留みずか とじとまる可べし

※ 秋暝 秋のひぐれ。

※ 空山 人けなき山

※ 浣女 せんたく娘。

※ 隨意 勝手に、とか、好きなようにの意。北周の庾信ゆしんの「蕩子の賦」に、「遊塵は床に満てども払うを用いず、細草は階を横（かたわら）にして随意に生ず」とある。

※ 春芳 春の花。

※ 王孫おうそん 「送別」の詩注（三五ページ）を参照。「楚辞・招隱士」にある、「王孫遊（たびたつ）んで帰らず、春草生じて萋萋せいせいたり」という有名な句に由来する。ここはそれを逆に使った。なお此の詩は、吉川・三好両氏著「新唐詩選」にも見える。

人けのない山に、新たに雨が降った後は、
夕べともなると、いよいよ秋らしい。

明るい月が松林の間に照り渡り、

清らかな泉が、石の上を勢よく流れている。

何だか竹がざわめくと想ったら、せんたく娘がお帰りなさるのらしい。

また、いやに蓮が動くと思ったら、なるほど漁舟が川下に下ってゆくのだった。

春の花は、勝手に散ってなくなるがいい。

若旦那は、そんなことに構わずに、ここでじっとしているから。

歸嵩山作

嵩山すうざんに歸りての作さく

清川帶長薄

清川せいせん 長薄ちようはくを帯おび

車馬去閒閒

車馬しゃば 去さつて閒かん閒かんたり

流水如有意

流水りゆうすい 意い有あるが如ごとく

暮禽相與還

暮禽ぼきん 相あい与ともに還かえる

荒城臨古渡

荒城こうじょう 臨のぞみ

落日滿秋山

落日らくじつ 秋山しゅうざんに滿みつ

迢遞嵩高下

迢遞ちようていたり 嵩高すうこうの下もと

歸來且閉關

歸來きらいして且しかく関かんを閉とざす

※ 嵩山すうざん 唐の東の都、洛陽の東方にある連峰の名。

※ 長薄ちようはく 草木が長長と茂り続けていること。晋の陸機の樂府、「君子有所思行」に、「清川 華薄を帶ぶ」とあり、更に同じ彼の「挽歌」に、「轡ぢなを按じて長薄に遵したがう」とある。

※ 閒閑かんかん 閑閑と同じ。車の動揺するさま。「詩經・大雅」に、「臨衝閑閑」とあり、毛伝に、臨は臨車なり、衝は衝車なり、閑閑は動揺するなり、とある。

※ 暮禽ぼきんの句 陶淵明の「飲酒」と題する詩に、「山氣日夕にっせきに佳よく、飛鳥相あひいに還かへる」とあり、この句はそれに、もとづいていよう。本選集「陶淵明」(四五ページ)参照。

※ 古渡こと 古びた渡し場。

※ 迢遞ちようてい はるかなさま。

※ 嵩高すうこう 嵩山連峰の一番高い峰、すなわち中嶽ちゆうがく

※ 閉關 門を閉じて、鍵をかけることで、世間と交渉を絶つ意。

清らかな川は、岸边に茂みをめぐらし、
馬車は、こころよく揺れてゆく。
川みずは、こころありげに流れ、
夕べともなれば、鳥はうちつれてねぐらに帰る。
古びた渡しを見下ろすように、荒れはてた城があり、
落ちかかる夕日の光が、秋の色濃き山いっばいに、みちみちている。
さあ、はるかなる崇高山の麓の、
わが家へ帰ってしばらく門を閉じ、静かな生活を楽しもうぞ。

歸輞川作

輞川もうせんに歸りての作さく

谷口 疏鐘動
漁樵 稍欲稀
悠然 遠山暮
獨向 白雲歸
菱蔓 弱難定

谷口こくこう 疏鐘動そしやうどう
漁樵ぎしやう 稍ようや稀まれならんと欲ほつす
悠然ゆうぜんたり 遠山えんざんの暮くれ
獨ひとり白雲はくうんに向むかつて歸かえる
菱ひしの蔓つるは弱よわくして定さだまり難がたく

楊花 輕易 飛

楊花は軽くして飛び易し

東臯 春草 色

東臯 春草の色

惆悵 掩柴扉

惆悵して柴扉を掩う

※ 輞川 「輞川閑居贈裴秀才迪」の詩注（一二七ページ）参照。

※ 悠然 人間の生活感情とは全然無関係に、のびのびとしているさま。

※ 菱 水草。夏に白い小さな花を開き、実は食用に供する。

※ 楊花 楊は柳の一種。柳は枝が下に垂れるが、楊は下垂せず上に真直ぐのびる。春、白い絮のような花が空中に飛散する。なお菱蔓・楊花は、ともに遠山・白雲とは次元の異なる存在として対比されている。

※ 惆悵 もの悲しいさま。

谷の入口あたりには、間遠な鐘の音が響き渡り、

漁夫や木こりの姿は、まばらになった。

のびのびとした遠い山の暮色。

ひとり、白い雲に向かって帰るのだが、

菱の蔓の弱弱しくて揺れやまず、

楊やなぎの花の軽くして飛び散り易いのを見るにつけ、
東の岡の春の草のたたずまいに、
ふとある哀しみを感じ、柴の扉を閉じる。

汎前陂

前陂ぜんひに汎うかぶ

秋空自明迴
況復遠人間
暢以沙際鶴
兼之雲外山
澄波澹將夕
清月皓方閒
此夜任孤棹
夷猶殊未還

秋空しゅうくう 自おのめいずけいから明迴
況いんわや復また人間じんかんを遠とほざかるをや
暢のぶるに沙際ささいの鶴つるを以もつてし
之これに雲外うんがいの山やまを兼かぬ
澄波ちようは 澹たんとして将まさに夕ゆうべならんとし
清月せいげつ 皓こうとして方まさに閒かんなり
此この夜よ 孤棹ことうに任まかせて
夷猶いゆう 殊ことに未いまだ還かえらず

※ 前つら 前の堤つら あるいは前の池。

※ 明めい廻けい どこまでも澄みきっていること。

※ 暢ちやう以い 心の伸び伸びするのは。

※ 兼けん之し その上に。

※ 澹たん 俗世における人間の執着など全くないように、さらりとしている感じ。

※ 皓こう 白い。

※ 方ほう間かん ころよい間けさに満ちあふれる。間は閑しずに同じ。

※ 任にん孤こ棹せう 一本の棹にまかせて。ひとり思うままに舟を動かす。

※ 夷い猶ゆう ぐずぐずする。もたもたする。但しここではよい意味。何ということなく時間をすごすこと。猶予と同じ。「楚辞・九歌」に、「君、行きたらずして夷い猶ゆうす」とあり、王逸注に、「夷猶は猶予なり」とある。またこの句は、南斉の謝朓の詩に、「驂さんを停とどめて我れ悵望しやうぼうす、棹せうを輟とどめて子夷い猶ゆうす」とあるのにもとづく。

※ 殊こと いつまでたっても。

秋の空は、おのずから高くはるかに澄みとおる。

ましてここはごみごみした所から遠くはなれ、その清らかさはかぎりもない。
こころをのびやかにするのは、水ぎわの砂のあたりにいる鶴。

そのうえに雲の上にそびえている山。

きよらかな波は、執着もなくさらさらとさざ波立ち、いまや日も暮れんとする。

やがて澄んだ月が、白く冴え冴えと輝きわたり、こころよい聞しずけさにみちあふれた。

今夜は、ひとり舟の棹さおに身をまかせ、

水の上にいさようて、何時までたつてもかえる気がしない。

新晴晚望

新晴の晚望しんせいばんぼう

新晴原野曠

新晴しんせい 原野曠げんやひろく

極目無氛垢

極目きよくもく 氛垢無ふんこうなし

郭門臨渡頭

郭門かくもん 渡頭とどうに臨のぞみ

村樹連溪口

村樹そんじゆ 溪口けいこうに連つらなる

白水明田外

白水はくすいは田外でんがいに明あきらかに

碧峰出山後

碧峰へきほう 山後さんごに出いづ

農月無聞人

農月のうげつ 聞人無かんじんなく

傾家事南畝

家を傾かたむけて南畝なんぼに事こととす

- ※ 趙殿成はこの詩を古詩に入れるが、ここで律詩と見なした。
- ※ 新晴晚望 雨つづきが、始めてからりと晴れた夕方の眺望。
- ※ 極目 見渡すかぎり。
- ※ 氛垢 きたない空気。
- ※ 郭門 城郭の門。村の入口の意。
- ※ 渡頭 渡し場のちかく。
- ※ 白水 白く見える川。次句の「碧峰」に対比させた。魏の劉楨の詩に、「方塘（四角なつつみ）、白水を含む」という句がある。
- ※ 農月 立夏（陽暦五月五日頃）以後の農事の繁忙な時期をいう。
- ※ 閒人 閒はおなじ。ひまな人。
- ※ 傾家 一家をあげて。
- ※ 南畝 南の田。

降りつづいた雨は、からりと晴れて、野はひろびろと果しない。

見渡すかぎりほこり気なく、まことに清しい。
里の門は、渡し場に臨み、
村の樹が、溪の口へとうち続いている。
白い川は、田の向うで明るくひかり、
みどりの峰が、山のうしろからのぞいている。
さて村は、いま農繁期。閑人などひとりもなく、
一家をあげて楽しげに、南の田圃で精だしている。

終南別業

終南しゅうなんの別業べつぎやう

※ 趙殿成は此の詩を古詩に入れるが、ここでは律詩とみなした。終南別業とは輞川莊もうせんじょう（輞川集の序）を参照。
四八ページ）を指す。別業は別荘。宋の魏慶之の「詩人玉屑」によれば、「此の詩、造意の妙は造物と相い表裏するに至る。豈に直に詩中画有るのみならんや。其の詩を觀るに、其の塵埃の中より蟬蛻し、万物の表に蟬蛻する者あるを知るなり」と評す。なお此の詩は吉川・三好両氏著「新唐詩選」にも見える。

中歳頗好道

中歳ちゆうさい 頗すこぶる道ぢゆうを好みこの

晩家南山陲
 興來每獨往
 勝事空自知
 行到水窮處
 坐看雲起時
 偶然值林叟
 談笑無還期

晩ばんにいえ家いえす 南山なんざんの陲ぼとり
 興きよう來きたば每つねに獨どく往わうし
 勝しょうじ事は空くわしく自みずから知しる
 行ゆきて水みずの窮きわまる處ところに到いたり
 坐ざして雲ぐもの起おこる時ときを看みる
 偶ぐうぜん然ぜんに值あい
 談だんしやう笑しやう 還かんき期き 無なし

※ 中歳 中年のこと。三〇歳くらい。この頃彼は妻を亡くした。

※ 頗 いささか。

※ 道 仏道を指す。彼は熱心な仏教信者であった。

※ 晩 晩年。四十過ぎれば晩年である。

※ 南山 長安の南方にある終南連山。

※ 勝事 自然のすぐれたありさま。また、それから受ける感動。使用例としては同時代の岑参の詩に、「聞道く

輞川 勝事多しと、玉壺の春酒 正に携えるに堪う」とある。

※ 空自知 自分より他に知るものもなき意。

※ 林叟りんそう きこりの老人。

※ 還期 かえるとき。

三十過ぎる頃から、いささか仏道に心ひかれ、晩年、終南山のほとりにすまいを設けた。

感興が湧くと、そこへひとりで出かけてゆく。

自然の美をば、私だけで鑑賞している。

ぶらぶらと、流れの盡きるあたりまであるいている——その時間。

偶然、きこりの老翁おやじに会ったりすると、

談笑に時を過ぎ、帰るのを忘れる。

贈劉藍田

劉藍田りゆうらんてんに贈る

籬中犬迎吠

籬中りちゆう犬いぬ迎むかえて吠ほえ

出屋候柴扉

屋おくを出いでて柴扉さいひを候うかう

※ 晩田ばんでんの句 稲が稔ると、租税として次から次へ供出し、稲田もおしまいに近くなって、はじめて家で食べる。

※ 余布よふの句 余った布で自分の着物をつくる。余布とは税として納めた残りの布。前の句も此の句も、租税が重く、人民の生活に余裕がないことをいう。漢の揚雄の「羽獵の賦」に、「百姓の膏庾、穀土・桑柘そうじやくの地を奪わず、女に余布有り、男に余粟よぞ有り、国家、殷いんんに富み、上下、交交きょうきょう足る」とあり、唐の李善注に、「孟子に曰く、羨あまりを以て不足を補えば、則ち農に余粟有り、女に余布有るなり」とある。

※ 詎肯なげの句 どうして公の仕事が無くてよいなどと言おうか。公事は、ここでは徴税をいうのであろう。

※ 煩君わんくんの句 この句の意は確かならず。

かきの中で、犬が何かに吠えている。

家から出て、柴の戸口の様子を見ると、

歳末のこととて、農民税を納めて、

山村の人が、夜帰るのだった。

かつての漢の揚雄は、「女に余布あり、男に余粟よぞありて国家、殷いんんに富む」などと申しましたが、ここの農夫は、作った稲は税として供出し、その残りをやっと家で食べる始末。

また女も、納付した残りの布を自分の衣料にするような、余裕のない生活です。

私は、徴税などの公の義務が、無くてよいなどと、どうして申しましょう。

ただ御面倒ながら、あなたに、税金についての当否をお尋ねいたすのです。

五言排律

送祕書晁監

還日本國 并序

舜觀羣后。有苗不服。禹會諸侯。防風後至。動干戚之舞。興斧鉞之誅。乃貢九牧之金。始頒五瑞之玉。我開元天地大寶聖文神武應道皇帝。大道之行。先天布化。乾元廣運。涵育無垠。苦垂爲東道之標。戴勝爲西門之候。豈甘心于叩杖。非微貢于苞茅。亦由呼韓來朝。舍于蒲陶之館。卑彌遣使。報以蛟龍之錦。犧性玉帛。以將厚意。服食器用。不寶遠物。百神受職。五老告期。況乎戴髮含齒。得不稽顙屈膝。海東

祕書晁監の日本國に還るを

送る 并びに序

舜の群后を觀えしめしとき、有苗服せず。禹の諸侯を會めしとき、防風後れて至る。干戚之舞を動かし、斧鉞の誅を興して、乃ち九牧の金を貢せしめ、始めて五瑞の玉を頒てり。我が開元天地大宝聖文神武應道皇帝（玄宗皇帝の尊号）は、大道之れ行ない、天に先んじて化を布き、乾元のごとく広く運く、涵びき育つること垠り無し。苦垂（未詳、或る本には若華に作る）を東道の標と爲し、勝（婦人の首飾り）を戴だきしひと（女仙人、西王母を指す）を西門の候がいと爲せり。豈に心を叩杖（西方からの貢物）に甘んぜんや。貢ものを苞茅（南方からの貢物）に徴するのみに非ず。亦た呼韓（匈奴の王の名）の來朝すれば、蒲陶之館に舍らしめ、卑彌（卑弥呼）の使を遣わせば、報ゆるに蛟龍之錦を以てするに由り、犧性玉帛、以て厚意を將ない、服食器用、遠物を宝とせず。百神は職を受け、五老（五つの星の精で、堯帝に瑞祥の現れる時を告げた）は期を

國。日本爲大。服聖人之訓。有君子之風。正朔本乎夏時。衣裳同乎漢制。歷歲方達。繼舊好于行人。滔天無涯。貢方物于天子。同儀加等。位在王侯之先。掌次改觀。不居蠻夷之邸。我無爾詐。爾無我虞。彼以好來。廢關弛禁。上敷文教。虛至實歸。故人民雜居。往來如市。晁司馬結髮游聖。負笈辭親。問禮于老聃。學詩于子夏。魯借車馬。孔丘遂適于宗周。鄭獻縞衣。季札始通于上國。名成太學。官至客卿。必齊之姜。不歸娶于高國。在楚猶晉。亦何獨于由余。遊宦三年。願以君羹遺母。不居一

告ぐ。況んや、髪を戴だき齒を含めるもの（人たるもの）は、類を稽すけ膝を屈めざるを得んや。海東の国、日本を大と爲す。聖人の訓に服し、君子の風有り。正朔は夏の時に本づき、衣裳は漢の制に同じ。歳を歴て方めて達するに、旧き好を行人（官名。外交官）に継がしめ、天に滔ぎつて涯し無きに、方物（地方の産物）を天子に貢せり。儀を司さどれるもの、等を加え、位は王侯の先に在り。次を掌さどれるもの、觀を改ためて、蛮夷の邸に居かず。我れ爾を詐ること無し、爾も我れを虞るること無かれ。彼れ好を以て来れば、関を廢し禁を弛うす。上は文教を敷けるにより、虚にして至れるものも実のりて帰えれり。故に人民は雜り居み、往來は市の如し。晁司馬は、髪を結ねて聖に游ばんとし、笈を負いて親に辞し、礼を老聃（老子）のごときに問ひ、詩を子夏（孔子の弟子。詩に通じた）のごときに学ぶ。魯は車馬を借して、孔丘は遂に宋周に適き、鄭は縞衣を献じて、季札の始めて上つ國に通ぜしがごとし。（晁司馬の）名は太學に成り、官は客卿に至れり。必らず齊の姜のみならずやと、歸つて高國（日本本国の貴族にたとえる）に娶らず。楚

國。欲其書錦還鄉。莊烏既顯而思歸。關羽報恩而終去。于是馳首北闕。裹足東轅。篋命賜之衣。懷敬問之詔。金簡玉字。傳道經于絕域之人。方鼎彝樽。致分器于異姓之國。琅邪臺上。廻望龍門。碣石館前。夔然鳥逝。鯨魚噴浪。則萬里倒廻。鷓首乘雲。則八風却走。扶桑若薺。鬱島如萍。沃白日而簸三山。浮蒼天而吞九域。黃雀之風動地。黑蜃之氣成雲。森不知其所之。何相思之可寄。嘻去帝鄉之故舊。謁本朝之君臣。詠七子之詩。佩兩國之印。恢我王度。諭彼蕃臣。三寸猶在。樂毅辭燕而未老。十年在

に在るも猶お晋のごときは、亦た何ぞ由余（人名）のみに独りせん。（晁司馬は）宦に遊ぶこと三年にして、君の羹を以て母に遺らんことを願ひ、（古賢者のごとく）一国に居らずして、其れ昼に錦きて郷に還らんと欲す。莊烏は既に頭にして帰らんことを思い、関羽は恩に報じて終に去れり。是に于いて北闕に馳首（？一本に稽首に作る）し、足を東轅に裹む。命賜の衣を篋にし、敬問の詔を懐にす。金簡玉字もて、道経を絶域の人に伝え、方鼎彝樽（皇室の先祖を祭る際の酒器）もて、分器を異姓の國に致さんとす。琅邪台上、竜門を廻望し、碣石館前、夔然として鳥の逝くがごとし。鯨魚の浪を噴くときは、則ち万里倒してまに廻り、鷓首の雲に乗ずるときは、則ち八風却ぞき走る。扶桑は薺の若く、鬱島は萍の如し。白日を沃ぎ三山を簸り、蒼天を浮べて九域を呑む。黄雀の風は地を動がし、黒蜃の気は雲を成す。森として其の之く所を知らざるなり。何ぞ相思を之れ寄す可けんや。嘻、帝郷の故旧より去りて、本朝の君臣に謁せんとす。七子（後漢の建安の七子と言われる七人の文人）の詩を詠じ、兩國の印を佩びたり。我が王度を恢いにし、彼の蕃臣

外。信陵歸魏而逾尊。子其行乎。余贈言者。

積水不可極
安知滄海東
九州何處遠
萬里若乘空
向國惟看日
歸帆但信風
鰲身映天黑
魚眼射波紅
鄉樹扶桑外
主人孤島中
別離方異域

子其行

に諭す。三寸（の舌）の猶お在りて、樂毅は燕を辞して未だ老いざるがごとく、十年外に在るも、信陵の魏に歸りて逾く尊と
きがごとくあらん。子、其れ行け乎。余は言を贈る者なり。

積水 極む可からず
安くんぞ滄海の東を知らむ
九州 何れの處か遠き
萬里 空に乗ずるが若し
國に向つて惟だ日を看
歸帆 但だ風に信す
鰲身 天に映じて黒く
魚眼 波を射て紅なり
鄉樹は扶桑の外
主人は孤島の中
別離 方に異域



音
信
若
爲
通

音いん
信しん
若いかん
爲かん
ぞ
通つう
ぜ
む